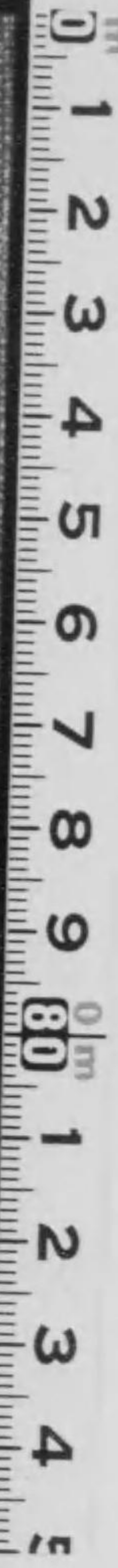


276

212



始





LEIC-17

小學教育研究會編纂

尋常  
小學校  
各學年遊戲の實際

小學教育研究會發行



276-2/2



尋常  
小學校

# 各學年遊戲の實際

序

物質的文明の進歩は常に人類を張子の虎にせよとする。故に眞に文明の向上を計るためには一方に文明の利器を利用すると同時に、一方には大に自然力に打勝つ自然的生活をする施設をなし、以て國民體力の充實を計ることに努めねばならぬ。英人が田園生活を尙び、米人が山川の跋涉を尊重するのは此のためである。

近時我國で著しく國民體育の呼聲の高くなつたのは實に此の文明の進歩に伴ふ自覺的要求で、同時に又國家の將來に對

序

大正

6. 8. 7

内交



序 二  
する時勢的要求である。

國民體育熱の勃興と同時に小學校に於ける體操科は大に尊重せられて來た。從來稍もすれば諸教科の末尾に附隨させられて居つた此の科が、今や智育・德育・體育といふ立場から、小學校全教科中で三分一の値を有つべきものであるといふことにまでなつたのは實に國民體育上御同慶の至りである。體操科は更に體操・教練・遊戯と三分せられて居る。而して體操科の尊重といふ時には多くは體操・教練の尊重を意味して居つて、特に遊戯は此の大勢から取殘される傾きのあるのは甚だ遺憾といはねばならぬ。然るに兒童生活から見て遊戯が體育に最も大切であることはいふまでもない。否、吾に體育の主要部をなすものであるの

みならず、實に智育・德育の根基をなすものである。因つて年來之が研究に従ひ、該科固有の理論と、兒童實際の成績とによつて、尋常小學校各學年遊戯の實際を編纂し、廣く世に公にして批評をこふことにした。書中記すところ尙ほ研究中に屬するものも少くない。併しこれによつて大に遊戯の研究を盛にし、以て幾分たりとも國民の自覺的要求と、國家の時勢的要求とに資することが出來たならば仕合である。

大正六年七月



尋常小學校各學年遊戲の實際

目次

第一章	體操科教授の要旨	一
第二章	遊戲教授の方針	二
一、	遊戲の本質	二
二、	體操科に於ける遊戲の位置	三
三、	遊戲選擇排列上の方針	四
四、	自由遊戲教授の方針	九
五、	動作遊戲教授の方針	一
六、	競争遊戲教授の方針	三
七、	行進遊戲教授の方針	七
八、	合同遊戲教授の方針	九

目次

一



九、教室内遊戯教授の方針	二〇
十、遊戯教授と運動會	二二
第三章 遊戯一覽	二五
第四章 各學年に於ける遊戯の實際	三一
一、各學年に於ける教授の實際	三一
(一) 第一學年	三一
(二) 第二學年	五三
(三) 第三學年	七三
(四) 第四學年	八五
(五) 第五學年	九六
(六) 第六學年	一〇六
二、遊戯教授上の注意	一一九
第五章 遊戯の道具	一二一
終	一二一

# 尋常小學校各學年遊戯の實際

小學教育研究會編纂

## 第一章 體操科教授の要旨



教則第十條 體操ハ身體ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメ四肢ノ動作ヲ機敏ナラシメ以テ全身ノ健康ヲ保護増進シ精神ヲ快活ニシテ剛毅ナラシメ兼テ規律ヲ守リ協同ヲ尙フノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス。

尋常小學校ニ於テハ體操教練及遊戯ニ就キ簡易ナル動作ヨリ始メ漸ク其ノ程度ヲ進メテ之ヲ授クヘシ又男兒及女兒ノ別ニ依リ其ノ授クヘキ事項ヲ斟酌スヘシ。

高等小學校ニ於テハ前項ニ準シ一層其ノ程度ヲ進メテ之ヲ授クヘシ土地ノ



情況ニ依リ體操ノ教授時間ノ一部若ハ教授時間ノ外ニ於テ適宜ノ戶外運動ヲ爲サシメ又水游ヲ授クルコトアルヘシ。

體操ノ教授ニ依リテ習成シタル姿勢ハ常ニ之ヲ保タシメンコトヲ務ムヘシ。

## 第二章 遊戲教授の方針

### 一、遊戲の本質

遊、戲、は、兒、童、の、生、命、で、あ、る、兒、童、自、然、の、生、活、か、ら、遊、戲、を、取、除、い、て、は、何、物、も、残、ら、な、い、遊、戲、は、兒、童、の、影、で、あ、る、兒、童、の、居、る、所、行、く、と、し、て、遊、戲、の、存、在、せ、ぬ、こ、と、が、な、い、實、に、遊、戲、は、吾、々、の、遠、い、祖、先、の、原、始、的、生、活、の、繰、返、し、で、あ、る、實、に、遊、戲、は、吾、々、人、類、の、餘、り、の、勢、力、の、發、露、で、あ、る、實、に、遊、戲、は、兒、童、將、來、の、生、活、に、對、す、る、準、備、で、あ、る、由、是、觀、之、遊、戲、は、兒、童、生、活、の、中、心、を、な、す、も、の、で、あ、つ、て、之、を、廣、義、に、考、へ、れ、ば、國、語、も、算、術、も、其、の、他、一、切、の、學、習、亦、一、つ、の、遊、戲、に、外、な、ら、ぬ、と、も、い、へ、る、否、更、に、進、ん、で、自、然、と、い、ふ、廣、大、美、麗、な、一、大、遊、戲、場、に、人、間、と、い、ふ、選、手、が、出、て、來、て、毎、日、活、動、に、娛、み、耽、つ、て、居、る、の、が、人、生、で、あ、る、と、も、い、へ、る、然、ら、ば、人、生、も、亦、遂、に、一、つ、の、遊、戲、と、看

做すべきものではなからうか。

然、れ、ど、も、狭、い、意、味、の、遊、戲、で、は、自、己、を、自、由、に、活、動、さ、せ、其、の、結、果、を、目、的、と、せ、ず、に、自、由、活、動、夫、自、身、を、娛、ひ、こ、と、が、本、質、で、あ、る、娛、ひ、た、め、に、は、其、の、活、動、は、努、め、て、自、發、的、の、活、動、で、な、け、れ、ば、な、ら、ぬ、此、に、至、つ、て、課、業、と、區、別、さ、れ、た、遊、戲、と、な、る、の、で、あ、る。

### 二、體操科に於ける遊戲の位置

體操科は體操、教練、遊、戲、の、三、つ、に、別、け、ら、れ、て、居、る、而、し、て、普、通、に、體操科といへば體操と教練とを其の全體であるやうに考へられて居るかの如き觀のあるのは從來の弊である。否、遊、戲、の、存、在、す、る、こ、と、を、知、ら、ぬ、も、の、は、な、い、け、れ、ど、も、之、を、實、際、に、行、ふ、上、に、於、て、誠、に、不、充、分、で、あ、る、の、は、甚、だ、遺、憾、で、あ、る、此、の、三、者、の、位、置、關、係、は、學、年、の、高、下、男、女、の、性、別、等、に、由、つ、て、自、ら、異、る、が、先、づ、第、一、二、學、年、に、あ、つ、て、は、専、ら、遊、戲、を、主、と、し、體操、教、練、を、副、と、し、第、三、四、學、年、に、至、つ、て、は、遊、戲、に、加、ふ、る、に、體操、を、以、て、主、と、な、し、教、練、を、副、と、し、第、五、六、學、年、に、至、つ、て、體操、教、練、を、主、と、し、遊、戲、を、副、と、せ、ね、ば、な、ら、ぬ、故、に、遊、戲、は、第、三、四、學、年、に、至、る、ま、で、體操科中の主要なものとして之を取扱ひ第五六學年になつても尙ほ之を決して忽にすへきものでない。而し



て女子にあつては高學年に至るも常に男子よりも之を重んじて取扱はねばならぬ。若し夫れ此の三者の大約の割合をいはんか、各學年を通じて大體體操五、遊戯三、教練二の割合を以て其の度とすべきであらう。

### 三、遊戯選擇排列上の方針

(一) 自發活動の領域の廣いもの 遊戯の本質が拘束なき自由活動にあるのであるから、遊戯を選擇するに當つては劣めて兒童各自の自發活動に委する領域の廣いものを探ることにならねばならぬ。勿論遊戯の種類によつては規律協同を主にするため或拘束を加ふることの止むを得ぬものもあるが、夫れにしても拘束の間に出來得丈各自の自發活動によらせる餘地のある、而も其の領域の可成廣いものを探らねばならぬ。

(二) 方法が簡單で趣味のあるもの 採擇する遊戯は努めて方法の簡單なものでなければならぬ。方法の簡單なものほど束縛が少く、従つて自由の餘地が廣い。彼の徒らに工夫考案した精緻な遊戯には遊戯としての價值を減却されたものが多い。故に方法の極めてサラツとしたものを探り、而も亦之が能く兒童の趣味

に合したものでなくてはならぬ。此の點から見て兒童が課外其の他で、眞に自由に嬉戯して居る際の所謂いたづら遊びは大に之を加味せねばならぬものである。

(三) 同時に多數のもの、行ひ得るもの 遊戯の種類は可成多數の兒童が同時にやることの出来るものでなくてはならぬ。彼の一學級六七十人の兒童中、僅かに五六人のものが行つて、他は之を順番の來るまで傍觀して居るやうな類のものも、は努めて之を探らぬことにせねばならぬ。

(四) 餘り機械の入らぬもの 遊戯は努めて機械の入らぬものから採擇せねばならぬ。徒らに多くの機械の入るやうな遊戯は機械設備の經費の上から事實之を行はしめることが出來ぬし、又假令機械の設備は出來ても、一人の教師で體操をやり、教練をやつて、更に一々遊戯の機械を取扱ふといふ手數が出來ぬ。況んや次ぎの時間の理科に實驗の準備や、手工に材料準備などせねばならぬのに於ては一層之を使用することが六ヶしい。故に努めて機械の入らぬもの、即ち殆んど教師は徒手で行つて行へる類のものが最もよい遊戯である。



(五) 誰にも出来て運動量の多いもの 遊戯によつては特殊の兒童丈に行ふことが出来て、誰にでも出来ると限らぬものがある。勿論兒童各自の體力に應ずる遊戯も必要であるが、之と同時に又どんな兒童にも行ふことの出来る類の遊戯でなくてはならぬ。而も亦其の遊戯は運動量の多い、努力的な全身運動のものを採ることが必要である。

(六) 自由遊戯の採擇 動作遊戯、競走遊戯、行進遊戯の外に自由遊戯といふものを採つた。蓋し從來の遊戯が餘り規律の方面のみを偏重したのに對して、時には眞に自由の活動をなさしめ、兒童各自の内部的要求を満足させ、快活な気分たらしめる方針である。勿論教師は充分周到な注意はして居るので、唯其の注意を兒童各自に自覺せしめない範圍で自由にやらせるのである。

(七) 時間の伸縮の出來場所の廣狹に關係の少ないもの 遊戯の種類によつては一定の時間やらないとどうしても止めることの出来ぬものがある。

此の種の遊戯は運動を基にせずに遊戯の順序技術を主として居るが、さうでなしに充分運動さへ出来たら必ずしも何分やるといはず、適當の時にはいつ

でも止めることの出来る類のものがよい。又徒らに廣い運動場でなければ行はれないやうな遊戯でなく、廣ければ廣いので行はれ、狭ければ狭くても行へる類の遊戯を選択することが必要である。

(八) 種類を可成少くして、反復練習に重きを置くこと 徒らに多くの種類について教授することをせず、極めて少い種類のものについて之を授け、よく之を反復練習せしめることにすべきである。習熟して初めて眞の面白味は生ずるものである。

(九) 學年の程度と男女の別 遊戯の種類は努めて學年の程度に適應して排列せねばならぬことは勿論で、更に男女の性別に應ずることが極めて必要である。此の細目では第三學年から特に其の別を明にしてある。之を兒童の實際から見ても、又法令の上から見ても第三學年は性別を認める適當の時期である。

(一〇) 各學年共通教材 學年の程度に應ずることを努めたと同時に、一方第一學年乃至第六學年に共通の教材を採取してある。之は其の遊戯の性質が何れの學年にも適應して居つて、唯學年の高下によつて其の運動の方法なり時間なりを



夫相當に斟酌すればよいといふのと、今一つは二個學年以上合同遊戯をなすことの出来るやうにするためである。

(二) 交換教材 各學年各學期に適當な教材を配當した外に、各學年につき二三種宛の交換教材を採取してある。之は兒童の實際及び其の教授の時期等によつて教授者に選擇の餘地を與へたのである。又兒童の實際によつては交換するでなしに、之も其の學年の教材に選擇しても差支はないのである。

(三) 他教科殊に唱歌との聯絡 何れの教材も他教科と關係を保たねばならぬことは勿論であるが特に遊戯は唱歌と密接不離の性質のものであるから、これとは大に其の聯絡をとつて前後の矛盾のないやうにすることを期せねばならぬ。

(三) 土地と季節とに適應すること 土地及び季節に適應することも、凡べての教科に必要であるが殊に遊戯では土地の事情に應ぜねば趣味もなく、又常に屋外で動作するものであるから季節に合致することが肝要なことである。故に茲に採つてあるものは努めて此の二點に留意してあるのである。

(四) 各教材毎には時間を指定せぬこと 教材は學年學期だけに配當して、其の各教材の各々に時間を指定してない。之は遊戯の性質上指定し難いのと、一つは教授者の運用の餘地を存してあるわけである。

(五) 好める教材の選出 以上各方面から見て適當な教材を選択したけれども、之を兒童に實際教授した後では、常に教師は一學期間なり、一學年間なりの成績に省みて、眞に兒童の好んで居るものを選び出させ、兒童の趣味を基にした精細な調査をして、以て其の教材の取捨をし、細目の修正をすることを怠つてはならぬ。

#### 四、自由遊戯教授の方針

(一) 束縛干渉の感をなからしめること 自由遊戯に於ては極めて周到な注意の下に、兒童各自をして更に束縛干渉の自覺なからしめることが主眼である。自由遊戯といつても勿論絶対的自由ではないので、唯其の制限する範圍が廣く、爲めに兒童各自は眞に自由の快感を覺ゆるのである。

(二) 兒童が自然にして居る遊戯を探ること 自由遊戯としてなさしめる遊戯



は、兒童が學校に居る際の放課中にして居る遊びや、家庭其の他で、兒童自然の欲求でやつて居る所謂遊戯の中から採らなければならぬ。勿論此等の中には教育上必ずしも採ることの出來ぬものもあるし、又採つても強ひて之をやらせようとすると自由でなくなるから、一に教師の暗示手加減を以て私かに之を指導する態度であらねばならぬ。

(三)遊具を與へる自由遊戯 時々二三種の遊具を準備して置いて、其の何れでも各自の好んで居るものを用ひて遊戯せしめる。此の際其の何れかを強ひて用ひねばならぬとしては自由でなくなるから、道具を用ひることなしに自由に遊ぶものもあることは勿論である。

(四)自然に親しむ自由遊戯 低學年では自由の範圍を廣くし、教師の注意は細かくして、以つて努めて自然物に親しむ自由遊戯を主とする。摘草、蟲追ひ、砂いぢりなどをさせるのが夫れである。

(五)男女の性別に應ずること 自由ではあるが、其の間常に教師は男女の性別によつて適當の暗示を與へることが肝要である。

(六)訓練の實現と見るごと 自由遊戯は主として兒童各自の自由に委してあるのであるから、最もよく其の躰を實現するものである。換言すれば實に此の自由遊戯によつて眞によく兒童平常の訓練の結果があらはれるのであるから、充分教師は此の點に留意して居ることが肝要である。

#### 五 動作遊戯教授の方針

(一)上品で無邪氣なるべきこと 動作遊戯は第一二學年にのみに課し、其の動作は極めて上品なもので卑俗に亘らないものでなくてはならぬ。稍もすれば動作が餘り藝術的となつたり、又徒らに滑稽的になつたりするから、大に注意して、上品無邪氣、淡泊なものでなければならぬ。之が爲めには方法が出來丈簡單なものであるべきである。

(二)動作は體操の目的に副ふこと 動作遊戯では、其の歌詞の内容を動作に表はすことは勿論であるが、併し其の動作は努めて體操の目的に副ふ運動であるやうにせねばならぬ。徒らに意味を表はすことに急にして、其の動作が體操の目的に副はぬ運動にならぬやうに注意せねばならぬ。



(三) 唱歌に熟して後に教へること 動作遊戯を授けるのは先づ夫れに用ふる唱歌を充分練習して後でなくてはならぬ。未だ充分に唱歌に習熟せぬのに其の遊戯を授けようとしては其の何れも不結果に終るものであることを牢記せねばならぬ。

(四) 第一次から一全體を授けること 動作遊戯は其の新に授ける第一次から一全體を取扱ふことが肝要である。彼の徒らに動作を細節小分して中途で切り、數時間の後一全體を完結する方法は興味の上からも、熟達の上からも不得策である。第二次第三次と漸次其の方法を細かに指導して行く漸進法によるべきである。

(五) 個人的と團體的との組合せ 動作遊戯にも個人的のものと團體的のものとあることは勿論であるが團體的のものではいふまでもなく、個人的の動作でも他の個人の動作と調和することが肝要である。而して同一の動作遊戯の中に、或部分は個人的にさせ、又或部分は努めて團體的にさせるやうに組合せることが大事である。

(六) 隊形は圓形を本體となすこと 動作遊戯を教へる時は横隊にしておいてする方が便であるが、漸く熟して來たらば努めて圓形にすることにすべきである。圓形は心情を圓滿親密、快活、純潔ならしめる性質のもので、幼少な兒童を取扱ふに適した隊形である。

#### 六、競走遊戯教授の方針

(一) 競走遊戯は遊戯の主要部 自由遊戯、動作遊戯、競走遊戯、行進遊戯の中で、競走遊戯を最も尊重し、之を遊戯中の主要部として取扱はねばならぬ。蓋し動作の機敏とか、全身の保健鍛鍊とか、精神の剛毅とか、規律を守り協同を尙ぶ習慣とか、所謂體操科で要求する目的の大部分は遊戯中では此の競走遊戯で到達するこゝとが出来からである。

(二) 勝敗を明瞭に審判し得るもの 競走遊戯は勝敗を的確明瞭に審判し得るものでなくてはならぬ。其のためには遊戯の性質や方法の可成簡明なものを探り、以つて多數兒童を一見して容易に且つ敏速に審判することの出来るやうにせねばならぬ。審判することが六ヶしく、従つて遅くなつて往々兒童の氣合をな



くすることはよく見る弊である。

(三)自然の性情から出る善良な敵愾心の表出 競走遊戯の窮極は勝敗を争ふことにある。勝つて得意になり、敗れて失意となるのは人間自然の性情である。而も進んで此の際再び大に勝敗を争はんとする意氣込、大に勝たんとする意氣、即ち善良な意味の敵愾心の起るのも亦正常自然のことである。勝つても更に喜ばず、敗れても更に残念に思はぬやうでは競走は出来ぬ。否、眞の競走をして居らぬから其の結果に對しても冷淡無關係であるのである。氣力の充實した競争をして居らぬからさうなるのである。而して此の勝敗に對して自然に出て來た善良な敵愾心は面貌舉動に之を表出させるがよい。即ち勝つたら大に鬨聲をあげさせる。負けても敵のために萬歳を唱へさせるといふのは從來の弊で、こんなことは獨り學校の遊戯丈である。是では眞に氣力の充實した競争のやれるものでもなく、又やつて居ないのである。勿論徒らに負けたものをさげしみ、勝つたものが妄りに横暴を極めることのないやうに注意せねばならぬ。是は一に教師其の人の指導に俟つべきものである。

(四)禮儀ある争 善良な敵愾心は之を起させるのみでなく、之を舉動にまで自然の發露として表出させることにすると共に、其の競走は常に禮儀を以て終始せねばならぬ。飽まで勝敗は本氣になつて争ふけれども、其の間寸時も禮儀に缺くる所があつてはならぬ。所謂其の争や君子の争といふ風にさせることに努めねばならぬ。

(五)攻撃的精神を基にした氣合のある争 國民精神の涵養は如何な場合でも最も重んじてやらねばならぬが、特に此の競走遊戯に於てはさうである。國民精神の中でも進取攻撃の精神は其の最も肝要な部である。これは我が國古來からの國民性である。武士は敵に首を取られるといはずに取らせるといつた。今日軍隊では退くといはずに背に進む即ち背進といふ。後を見ない、唯進む一途あるのみとするのが國民の立て前まである。因つて競走遊戯では努めて此の攻撃的精神を鼓舞せねばならぬ。徒らに保守退嬰を事とするやうなことなく、進んで碎ける決心の養成を主とせねばならぬ。而して此の基礎の上に立つて、最も氣合の充溢した競争をさせることが肝要である。機先を制し、氣を以て敵を服するの概



あらしめることが最も大切である。

(六) 各自の全力を以て争ふべき個人的競走。競走遊戯にも個人的競走遊戯と團體的競争遊戯とあつて従來は競走遊戯といへば一も二もなく團體遊戯の方を主としたものだが、將來は團體の競走と同じく大に個人的競走も之を尊重せねばならぬ。蓋し生存競争劇甚となるにつれて、人生生活の各方面には此の二方面が兩々相對立して居るのである。故に各自の全力をこめた元氣の充實した争も大に之をやらせる必要がある。而して之には又一面兒童各自の體力に應じて最大の力を出させるとが出来るといふ教育的の價值も存して居るのである。

(七) 規律協同を主とすべき團體競走。團體競走ではむしろ個人を犠牲として、團體のために規律を守り協同を尙び一致事にあたつて初めて事を成就し勝を得るものであることを切實に經驗せしめねばならぬ。對國家、對民族、對社會の争は正さに是であつて、其の大切なことはいふまでもない。而して従來から遊戯では此の方には比較的留意せられて居るのは喜ばしいことである。

(八) 男女別にすることを本體とすること。競争遊戯は男女合併でも教授し得

ものもないでもないが、其の主眼點が争ひにあるのであるから、體力性情の自ら異つて居る男女は可成別々にして之を行はせることを本體とすべきである。

#### 七 行進遊戯教授の方針

(一) 快活、優美、調和を主眼とすること。女子にやらせる行進遊戯では快活な氣分にすること、快活な氣分ですることが最も肝要である。快活から進んで輕快、純潔の氣持にまで到達せねばならぬ。而して其の舉措動作は優に、やさしい所が此の遊戯の眼目でなくてはならぬ。更に個人として、團體としてよく調和、整正して茲に初めて行進遊戯の特長を發揮するのであるから、此の三點に向つて進まねばならぬ。

(二) 習熟を目あてとすること。行進遊戯は反復練習して段々習熟すればするほど面白くなるのであるから、常に之に習熟させることを目あてとせねばならぬ。快活な氣分も、優美も、調和も習熟して初めて出来ることである。行進遊戯教授の要は一に此の習熟を目標とせねばならぬ。

(三) 新しいものを追はぬこと。行進遊戯教授の目あては習熟にあるべきであ



るのに、稍もすると新しい材料を探がすことに急であつて、一向其のどれも面白味の出るまで習熟せぬのが從來の弊である。盆踊は數千百年の間同じにやつて居つて何時でも面白い。否同じだから面白いのである。之を毎年新らしくして行つては今日に自然に残るまでに面白いものとは思はれなかつたであらう。此の遊戯で陥りやすい新教材を追ふ弊は絶対にやめねばならぬ。

(四) 土地の風習を顧慮すること。行進遊戯は其の服装によつてやれるものとやれぬものとある。所謂都市の地方で比較的輕快な服装をして居る所では面白く快活に出来ることでも直に夫れを田舎の地方の藁草履穿きの子供にやらせても一向面白くなく、否更にやられない。又其の地方の風習の如何によつても大に其の種類を斟酌せねばならぬ。

(五) 全體として揃ふこと。行進遊戯は個人としては平均運動でよく其の身のこなしをとつた調和を保つとが必要であるが、更に又全體としてよく揃ふといふことを主とせねばならぬ。その全體としてよく調和しよく揃ふといふ所に興味もあり美もあるのであるから、此の點について充分に努力せねばならぬ。

#### 八 合同遊戯教授の方針

(一) 壯大な快感を主とすること。普通は一學級なり、一學年なりで遊戯して居るのに、時々二三個學級の兒童又は全校兒童を合同して遊戯させるとは大に兒童の氣持を壯んにする効がある。此の壯大な快感を味はせる外に數學級又は一學校としての統一も出来るので、合同體操等の上では必ず合同遊戯を行はせることが必要である。

(二) 規律協同を主とすること。大部隊の合同であるから之が統一調和を計るために大に之で規律協同を主とせねばならぬ。此のとが缺けて居つては殆んど合同遊戯は成立たないことになるのである。之が爲め其の基礎となる躡付を各學年各學級で充分やつて、然る後に之を行はしめることにせねばならぬ。

(三) 教材は低學年の教材又は共通教材であるべきこと。合同遊戯の教材は二個學年以上合併してやるのであるから、其の教材は低學年で教へたもの、又は各學年に共通の教材から採るべきである。

(四) 大部隊同時に運動し得るものたるべきこと。合同體操でも大部隊のものが



同時に運動し得る類のものを選ぶことが肝要である。例へば後に記してある子殖し鬼のやうなものは運動場に一杯になるほど多数の子供を同時に活動させることが出来る。かうなると合同遊戯は實に經濟的な遊戯になるのである。

#### 九 教室内遊戯教授の方針

(一) 教室内の遊戯は、心機一轉を主眼とすること。雨天の際に、雨天體操場のない學校では教室内で遊戯をやらせる必要が生ずる。蓋し雨天の時は活動力の充溢して居る兒童は單に家庭から學校までの往復丈の運動で満足する事が出来ぬ。因つて雨天に際しては教室内で適當な體操もさせるのであるが、之と同時に又遊戯もやらせなければならぬ。併し此の際の遊戯は身體の運動を主にするのではなく、氣をかへることに重きをおかねばならぬ。即ち心機を一轉させて、精神上の疲勞倦厭を一掃し、沈滞せる心意の生々活動するやうに導くことが、主眼である。此を目的として種類も方法も考慮せねばならぬ。

(二) 塵埃の立たぬ遊戯。教室内でやる遊戯の主眼が心機を一轉させるにあるからには、徒らに運動動作せしめて室内にほこりを立てるやうな遊戯であつて

はならぬ。どん／＼と音をさせてちりほこりを立て、爲めに室内の空氣を不潔にし却つて遊戯させなかつた方がましであつた結果を來すものであるから、此の點は大に留意せねばならぬ。即ちむしろ靜的の遊戯を探らねばならぬ。

(三) 喧噪にならぬ遊戯。可成塵埃を立てぬやうな遊戯であると同時に、又餘り喧噪にわたらぬ遊戯でなくてはならぬ。蓋し教室内で行はせるために、隣りの教室其の他に夫々教授をして居るのに、障礙を及ぼしてはならぬことはいふまでもない。

(四) 室内備品を利用はするが、可成位置をかへぬ。教室内でさせる遊戯は室内備へ附のもの、特に机腰掛等を適當に利用することは勿論であるが、併し可成其備品の位置排列等をかへずに利用する工夫が必要である。徒らに備品の位置をかへては單に次ぎの時間の學習に差支を生ずるのみならず、甚だ八ヶましくもなり、又器物保管の上からも困ることが生ずるのである。

(五) 最も留意すべき通風。教室内の遊戯では通風といふことに最も留意せねばならぬ。之が充分でなかつたならば、常に効果が無いのみでなく、大に害になる



ことも少くない。故に此の點に向つては充分の用意がなくてはならぬ。

#### 十 遊戯教授と運動會

(一) 平素の遊戯を組合せた運動會 平素の遊戯は平素の遊戯として課し、愈運動會となると又特別な遊戯を工夫してやらせるのが從來の弊である。運動會だから何か面白い遊戯にせねばならぬと考へるのは、平素やつて居る遊戯は一向面白くないものであることを表はして居る。

因つて運動會では努めて平素行はせて居る遊戯を其のまゝにやらせ、又よく夫等を組合せたものをやらせねばならぬ。

(二) 徒らに運動會の遊戯の練習を攻めぬと 平素の遊戯と交渉のないものを運動會でやらせるから、運動會の前は遊戯の練習で攻めつけて居る。兒童は殆んどあき退屈するほど練習させられる。面白かるべき運動會は實に兒童にとつて一大苦痛であるやうな奇現象を呈して居る。而して一たび運動會がすめばもう其の遊戯には用がないといふ風である。今後の運動會では此の弊を一掃せねばならぬ。

(三) 個人的競走遊戯を運動會に入れると 平素の遊戯が從來團體的の競走遊戯に偏して居つたことは已に述べたが更に運動會に於ても此の個人の力一杯やる競走遊戯を入れることが必要である。而して可成學年年齢等を基にした競走上のレコードを作ることが大切である。唯誰が一等であつた二等であつたといふ丈では眞の進歩向上が計られないのである。

(四) 運動會では大に遊戯の學年的比較研究をすること 平素各學年を主として遊戯させて居るのに對し、運動會の場合にはすべての學年が同一の場所に、同時に又は時を異にして演技するのであるから、努めて學年的に比較し、其の適否、巧拙進歩の過程等を研究せねばならぬ。又徒歩競走の如きものも、其の距離を學年相當にして、一學年乃至六學年を同時にやらせ、大に其の各學年の高下による異同點を探究せねばならぬ。

(五) 運動會の遊戯で運動量を充分ならしめると 運動會といふとまず餘所行の着物を来て、運動量の充分な遊戯のやれないやうな服裝にする弊がある。故にまづ服裝は運動を基にしたものに改めねばならぬ。次に運動會では全校兒童



にやらせるため、兒童一人當りの運動量は極めて少いもので、中には午前中に唯一回やつて後は他人の運動を傍觀させておくといふ類の運動會もある。爲めに兒童は運動會の日は平日よりも運動不足であるといふ現象を呈することがある。因つて今後の運動會では充分運動し得る服裝にし、而も運動量の多い遊戲を可成回數を多くやらせる方針とせねばならぬ。

### 第三章 遊戲一覽

#### 第一學年

(交換教材) 毬送 模倣行進	角 旗 網 毬 鳩 毬 拍 徒 自	一 學 期
	手 步 由 行 競 遊	二 學 期
	力(男) 廻 引 拾 入 進 走 戲	三 學 期
	毬 月 猫 汽 整 角 網 同 同	一 學 期
	列 競	二 學 期
	運 鼠 車 走 力(男) 引	三 學 期
	源 た 場 同 同 同 同	一 學 期
	平 か	二 學 期
	人 へ	三 學 期
	捕 こ 鬼	一 學 期



第二學年

(交換教材)	輪子ひ毬場角網徒自	一
	潛 殖ば 取 步由	學
	旗 送 鬼り移鬼 力(男) 引走戲	期
蛇行競走 地球送	友二浦交同同同同	二
	島換 捕人 太競	學
	鬼鬼郎走	期
	帽千雪西同同同同	三
	子鳥 洋	學
	取競 毬走 奪走 鬼	期

第三學年

(交換教材)	大圍踵角網徒自	一
	み趾 步由	學
	繩破 競遊 跳り動(女) 力(男) 引走戲	期
時爭 輸送	巴をべ同同同同	二
	つーボルカ(女)	學
	競ぼ取り	期
	蛇四旋同同同同	三
	行風 色競	學
	切れ旗走 送旗走	期







第六學年

(交換教材) 砲彈 蛙跳(男)	繩 倭 大 角 網 徒 自 正 行 步 田 進(女) 力(男) 引 爭 戲 跳(女) 運(男)	一 學 期
	頭 海 同 同 同 同 上 毬 送(女) 戰(男)	二 學 期
	二 人 繩 跳(女) フットボール(男)	三 學 期

第四章 各學年に於ける遊戲の實際

一 各學年に於ける教授の實際

尋常科第一學年

(第一學期)

(一) 自由遊戲

自由遊戲は例へば次の様なことを自由にさせる。

(一) 草くらべ 運動場又は校外で様々の草をつんで互にその種類を比べ合つて遊ぶ。

(二) 砂遊び 運動場に設けてある砂場へ樹シヤブル、バケツ等を備へて置く。兒童はこれを用つて遊ぶ。

(三) ばつた追ひ 兒童はふるひ又は捕蟲網等をもつてばつたや蝶やとんぼ等を運動場又は校外で捕へて遊ぶ。

(四) まゝごと 小石や草などを集めてきて賣買のまねやお客遊びなどをして遊



ぶ。

(五) 其他

輪まわし、凧上げ、毬つき、蛙跳、石けり、繩とび、お手玉、飛行機(折紙細工)遊び、角力追ひ合ひ等、を自由にさせる。

(二) 徒歩競走

一、準備

用具—運動帽(兒童數)、女子はたすき(毬一組の兒童數以上)。

二、方法

かりに全生を五十人とすれば、五組に分けて五列横隊とし、兩手間隔に開いて各帽を冠らせ、足下に毬を置かせ、次に三十間位はなれて後ろに向いて毬に向はせる。

第一列(四十一番より五十番迄)は、始めの號令で駆け出し、前方にある毬一つを拾つて出發點まで走つて歸らせ、其の先着者三名は別に並ばせ、次の十人(三十一番より四十番迄の組)即ち第二列を同様に走らせ、第三四五列各同様にさせ、後、一二三着のものゝみを一列として再び走らしめる。

三、注意

(一) 各列の出發點に一の横線を引き、決勝點と定める。

(二) 出發點に於て兩手間隔に開かしめるには横隊で手繋ぎをなさしめるが便利である。

(三) 毬は各自に所定の場所に置いて歸らしめる。

(三) 拍手行進

一、準備

一列又は二列の縦隊に整列する。

二、方法

教師は先頭となつて兒童に向ひ、拍手を以て步調を取りつゝ、圓形又は渦卷行進等をする。

三、注意

(一) 教師は時々拍手を止めて、一列の時は片手、二列の時は兩手を高く擧げて目標を示し、以て注意を促し、姿勢を矯正する。步調の揃はぬ時は全生一、二の呼唱を唱へ、教師は手と共に三、四を唱ふるか或は唱歌を歌はしめる。



(二) 教室の出入等にも此の行進をなさしめる。又競走遊戲として二組に分け、教師は教壇上で拍手を以て調子をとり、停止して行進の優劣を審判する。

(四) 毬入

一、準備 用具—紅白の小球生徒數以上、樽又は帽子生徒數八尺位の竹一本、一尺五寸位の籠一個。

二、方法 竿の先きに籠を付け、場の中央に立て、紅白の毬を其の下に散布する。全生を紅白に分け、樽又は帽子、紅組は白組の伍間に入つて、一列圓形となり、竿を中心として唱歌を歌ひつゝ行進する。其の中教師の笛聲で兒童は直に自分の組の毬を拾ひ、籠に投入する。次の笛で直ちに二列直線に對向してならばせる。教師は籠の中の毬を紅白合せて二個づゝ高投し、兒童と共に數へ、多く入れた組を以て勝とする。而して勝つた組の色の布片を竿に縛り付けて勝ちの標とする。以上の如く數回行つて勝負を決する。

三、注意

(一) 唱歌を歌ひつゝ廻るとき内方側面に向いて手を繋ぐ等種々變化するこ

とをよしとする。  
(二) 籠を二個所に立て、紅白各々毬を全部早く入れし組を勝とするも可。  
(三) 止めがあつてから毬を拾つて入れない様に注意すること。

(五) 鳩

一、準備 一列圓形にして圓の中心に向はせ、兩手間隔を取らしめる。

二、方法

ぼつぼつぼ

鳩ぼつぼ

豆がほしいかそらやるぞ

みんなで仲よく

食べにこい

鳩ぼつぼ

兩臂側舉上下振動三回終りに手を下す。  
拍手三回。

左掌の豆を右手にて四回投與す。

兩手を下す

右手を肩の高さに舉げて手招きする。

拍手三回。



豆がうまいか

両手を胸の前に合して手頭を上下に動かしたつ圓の中心に進む。

食べたなら

手頭を動かしながら後ろにさがる。終りに両手下垂。

一度にそろつて

右向をなす。

飛んで行け

兩臂を左右にて上下に振動しつゝ圓周の方向に進み歌の終ると同時に臂を下垂して中心を向く。

三注意

動作は四回位に切て教へる。即ち第一回にぼつぼつ鳩ぼつぼの動作を教へ、以下は歌ひながら行進をなさしめる。第二回目には食べに來い迄動作を教へ、以下終り迄歌ひながら行進をさせる。第三回目には食べたなら迄、第四回目には終迄とする。要するに動作は四回なれども唱歌は毎回終りまで唱へしめること。

(六) 毬拾ひ

一、準備 用具—小毬生徒數

二、方法

運動場の一侧に全生を一行横隊に並べ、其の反對側に小毬を生徒數だけ置く。

全生同時に駆歩して小球一個づゝ拾つて歸り、早いものから教師に向て一行縦隊に整列する。

三、注意

(一) 小球小數の時は全生を二分して場の兩側に並ばせ、交互におこなはしめる。

(二) 紅白の二組に分けて球を早く拾ひ、元の列中に入る。整列の早いものを勝ちとするもよし。

(三) 紅白交互の圓陣を作つて圓の外方に小球を散布し置き、唱歌行進中笛聲にて行進を止め、毬を多數拾ひ取つて元の圓線上に歸らしめる。此の場合



は別に勝敗を決せざるものとするも可。此の時毬を圓内に置く時は危険の憂ひがあるから必ず圓外數歩の處に置くこと。

(七) 綱引

一準備 用具—紅白の旗二本 綱一本

二方法

運動場の凸凹なき處に綱を眞直に置き、綱の中央に布片を縛り、其の左右一間位の所に赤白の旗か、或は豆囊を置いて目標とする。

全生を紅白の二組に分け、綱に向て進み、綱の中央より左右に分れて、先頭生は兩端に位置する。用意の號令で適當の位置につき、初めの號令で引き合を始めるのである。

三注意

(一) 最初紅白何れより引き初めるかを教師定むるがよい。若し勝手に引き出すときは力の出し方が甚だ不調和となる。

(二) 豫め綱を眞直にする事と土地の高低凸凹なき所を選ぶ事が大切である。

(三) 勢援者の調子に外れた力は効力は少ない。又味方の綱が中途で曲つた時は力は非常に減ずるものである。

(四) 綱の引方は第一立ちたる儘、第二中腰、第三尻を地に着けしむることを練習する。

(五) 第一第二は手元に變らず、足元は進退するが、第三は體の位置は變らずに手元は變る。

(六) 平常體操時間に行はしめるには低學年や、女生にも課する事故、第一第二の方法で行はしめる方を可とする。

(七) 飛付綱引綱の側方數十歩の所から駈けて來て早いものから引き始める。此の法は低學年では困難である。

(八) 運動中綱の下になると危険であるから、尤も注意をすること。

(九) 低學年と高學年と相對して競争せしむることも面白い。人員はその時に適當ならしめるが、凡そ六年生二十名位に一年生五十名位がよろしからう。



(八) 旗廻り競走

一、準備 用具—旗五本

二、方法

運動場の片側に小旗二間位の間隔に立てる。  
全生を十人位づゝに分けて、先方の旗一本を二人位づゝ廻らしめて、早く  
出發點に歸らしめる。

三、注意

- (一) 旗の代りに生徒を立たしめるも可。
- (二) 旗の廻り方は右或は左より定め置き、全生一度に運動せしむるも可。
- (三) 六十人の兒童ならば六人宛の連續競争を成さしめるも可。

一、準備 土俵(砂場)

二、方法

全生を紅白に分ち、更に各四列位にして、場の兩側に蹲居せしめ、用意の號

令で各第一列のみ技場に進み立つ。始めの號令で對向のものと始め、負け  
たものは味方の後に退き、勝つた者は敵の第二列のものを相手とし斯く  
の如く順次に行つて勝者の多き組を勝と定める。

三、注意

- (一) 砂場のない時は押出角力を成さしめる。
- (二) 勝負に當り論争せしめてはならぬ。
- (三) 虚實の秘術を盡す所に妙味がある。土俵に出た以上は敵の油斷をつく習  
慣を養成するがよい。
- (四) 高學年には簡易なる角力の手を教へて行はしめる方が興味がある。
- (五) 雨天の時は屋内體操場に於て座角力を取らしめるも可。
- (六) 科外の運動として休憩時間に自由に行はしめるには最も良い運動であ  
るが、相互に眞面白に行はしめることが肝要である。怪我は大抵不眞面目  
から起るものであるから注意すべきことである。
- (七) 女子には平均台上で落とし合ひ、又は地上に直線を書き其の兩側に前後列



對向せしめ、更に後方二間位の地に一直線を書いて、其の線上迄引合をな  
さしめる。

(八) 全生を兩組に分けて決勝せしめるには弱いものから初める方がよい。勝  
つた組で一回も取らなかつたものは味方のみで成さしめるようにする  
のである。

(第二學期)

(一) 整列競走

一、準備 紅白の帽子又は襖生徒數だけ

二方法

全生を二分し紅白の帽子を冠らせ、前列赤(白)後列白(赤)として、二列縦隊を  
作らせる。而して適當の場所に紅白の旗を立て目標とする。

「始め」の號令で唱歌を歌ひながら行進を始める。或は教師が先頭となつて  
拍手行進をする。行進中教師の笛聲の合圖により各兒童は各定められた  
位置に駆けて行つて整列し、一番より順に兩臂を前方肩の高さに上げて

整頓し、直れの號令で兩手を活潑に下す。而して整列せる時間の遅速と整  
頓の正、不正によつて勝負を審判するのである。

三、注意

(一) 整列早くも整頓の悪い組は負とし、尙兒童の姿勢、意氣、態度等も加へて審  
判せなければならぬ。

(二) 整列の場所は熟練した後は行進中豫告してする方が興味がある。

(二) 汽車

一、準備 用具なし

二方法

全生を甲乙兩組に分けて各二列縦隊に編成し、兩先頭生は約三間を隔て  
、對向せしめる。

甲組は前後列相向つて兩手を高く舉げ、乙組は拍手して唱歌を歌ひなが  
ら甲組の列間を通過し、約三間の處に停つて甲組の行つたやうにして兩  
手を舉げる。次に又甲組は乙組の列間を通過す此くの如く甲乙交互に絶



えず行ふ。

三、注意

- (一) 兩臂を舉げる事なく、前後列連手門を作らしめるも可。
- (二) 熟練せば三間の距離を取らず連続的に行はしめる。
- (三) 猫鼠

一、準備 用具なし

二、方法

内方に向つて手を繼がしめて一列圓陣となし、而して右翼生一名を猫として圓外に、左翼生三四名を鼠として圓内に置く。

圓陣手繋で唱歌を歌ひつゝ、右へ行進せしめ、唱歌終つて一同は停止する。猫は手繋の下を自由に潜つて鼠を捕へようと、して之を負ふ而して鼠の一人に手をふれた時は右左翼から次の者を猫鼠に出して又行進唱歌を歌ひながら最初の如く行はしめる。

三、注意

- (一) 猫が鼠を容易に捕へない時は中止して兩翼から次の番を出して更に第二回目を行はしめる。
- (二) 兒童は猫鼠になる事を希望する故なるべく人を變へ全生一回宛は出演せしめること。
- (三) 熟練せば圓生は鼠の通過には連手を舉げて便利を與へ、猫の通過には連手を下げて不便ならしめる方興味が多く、圓陣にある兒童の運動量を増すことになる。
- (四) 最初から猫に帽子か襷等の目印を付けて行はしめ、捕へられた鼠は猫の部下になつて他の鼠を捕へしめるも可。
- (五) 生徒多數の時は二組か三組に分つか、または猫二人鼠五六人とするもよし。
- (六) 猫に襷を掛けしむれば目印となりて便利である。

(四) 月

一、準備なし



二方法

一列圓形にて連手して圓の中心に向はしめ、内二名鬼として圓の中心に蹲居せしめる。

出た出た月が 拍手、

丸い丸いまんまるい 連手右へ行進、

盆の様な月が 同じく左へ行進、

陰れた雲に 連手足踏み、

黒い黒いまつ黒い 連手の儘圓の中心に進みて止る、

墨の様な雲に 連手の儘蹲居する。

また出た月が 起立して後ろに退く、

丸い丸いまんまるい 連手右へ行進する、

盆の様な月が 拍手、

唱歌終れば圓内の鬼は目を塞ぎ、圓線の一人を捕へてをのれにかはらしめる。

三、注意

(一) 鬼は布で目を正しく閉ぢること。

(二) 鬼は歌詞一つ／＼で交代せしめる方可。

(五) 毬運

一、準備 用具—毬(生徒數)

二方法

全生を二分して運動場の兩側に並ばしめ、各整列線の前方一間位の處に横線を引く。而して片方の線内に毬を入れ置く。

毬を置かない方の組は始めの號令で各自毬を一回に一個づゝ持ち歸つて味方の線内に置く。此の如く數回往復して毬を全部味方の圓内に運んでしまふ。次に反對側の組のみ行ふ。

三、注意

(一) 往復の際衝突せない様注意をなすこと。

(二) 一回にいくつも拾はない様特に注意すること。



- (三) 毬は必ず線内に置くこと。
- (四) 競争を成さしむるには各列を二等分して拾はしめた後、一齊に數へしめて其の多き方を勝と定める。

(第三學期)

(一) 場換鬼

一、準備 用具—帽子五、六個(男)襷五六本(女)

二、方法

全生を二等分して二十間程隔つて運動場の兩側に整列せしめ、而して其の兩方より二、三人の鬼を出して、帽子を冠らしめて中央に出させる。全生一同一、二、三、の掛聲を以て兩側生徒位置の交換をなし、其の途中にて鬼に捕へられたものは代つて鬼となる。

三、注意

- (一) 鬼は運動場の兩側二十間程を隔て、引いた線外に出ることをゆるさな

す。

- (二) 紅白に分けて、中央なる鬼は互に敵を捕へしめ、其の捕へられた數の多寡に依り勝敗を決するも一法である。

(二) たこ

一、準備なし

一、方法

二列圓形とし兩手間隔を取つて圓の内方に向はしめる。

(一) たこく上れ

上を向き顔前にて拍手終りに兩手を下す。

風よく受けて

徐かに兩臂を前方より上下す。

雲まで上れ

右臂を上下す。

天まで上れ

左臂を上下す。

(二) 畫だこに字だこ

右足を跪き兩臂を横より圓く上ぐ。

どちらも負けず

徐かに兩臂を下しつゝ起立する。

雲まで上れ

(1)と同じ。

天まで上れ

(2)と同じ。



(二) あれく上る たこく上れと同じ。

引けく糸を 手腰二歩後退する。

あれく上る 徐かに兩臂を前より上下す。

放すな糸を 二歩前進圓形に連中す。

三注意

數列の横隊でもよし

(三) 源平人捕

一準備 用具—赤白旗二本づゝ

二方法

全生を均勢の二組に分けて、各一列の横隊に並べ、列間を二間位にして相對向せしめる。各組の後方數十歩の處に一線を引いて味方の陣地とする。教師は兩組の中央で、用意の號令を下す。然る時は全生一、二、三と活潑に唱へる。教師は三と共に片手を高く上げる。其の舉げし手の方の組は後方自分の陣地に逃げ込む。他の組はそれを負ふて途中で之を捕へんとする。而

して捕へられたるものは教師の兩側に整列する。次に集れの號令で舊位置に並び、第二回目を行ふ。此の如く數回行つて捕虜の多かつた方を勝とする。

三注意

(一) 兩組共中央から左翼全部前後列が位置を交代して行ふときは、毎回捕虜を檢査して優劣を決する事が出来る。

(二) 後方の線は引く事なく、後方の樹木とか壁迄とかする方が便利である。

(三) 捕虜は一旦教師の元に來れば其の數を調べて返し、次回に参加せしめるもよし。

(四) 教師は逃ぐる方に旗を舉げて知らしめるもよし。

(交換材料)

(一) 毬送

一準備

用具—小球二十個竹籠二個



二、方法

兒童を二組に分け五六間を隔て、同方向に横隊に並ばしめ、各一番の足元に小球十個づゝ置き其の反對翼に空籠一個づゝ置く。

「始め」で各一番から小球一個づゝを送つて反對翼の籠に早く入れた組を勝とする。此の如く數回行つて勝敗を決する。

三、注意

- (一) 球を送る際投與せざる様にする事。
- (二) 球は籠の外に落ちたるものは無効とする。
- (三) 球は必ず一個づゝ送ること。
- (四) 列を亂すこと多い又途中で一人が二つも一度に受取らねばならないやうな場合が出来て來ることがあつても一個づゝ以上は送らないこと。

(二) 模倣行進

一、準備

全生を一行又は二列縦隊に整列せしめる。

二、方法

教師は先頭となり行進中左の動作をなす、生徒は唱歌を歌ひながら教師の動作を真似して行進をする。

- 1. 兩臂側舉 2. 兩臂上舉 3. 片手腰片手上 4. 拍手
- 5. 兩手頭 6. 屈臂 7. 兩手腰 其他

三、注意

- (一) 二列縦隊の時は兩臂側舉を行ふ事を得ない、又運動の順序等何れにてもよ。
- (二) 十六步行進すると動作を變更する。
- (三) 左翼を先頭とする方が便利である。
- (四) 興に入りて列を亂すことなき様にせなければならぬ。

尋常科第二學年

(第一學期)

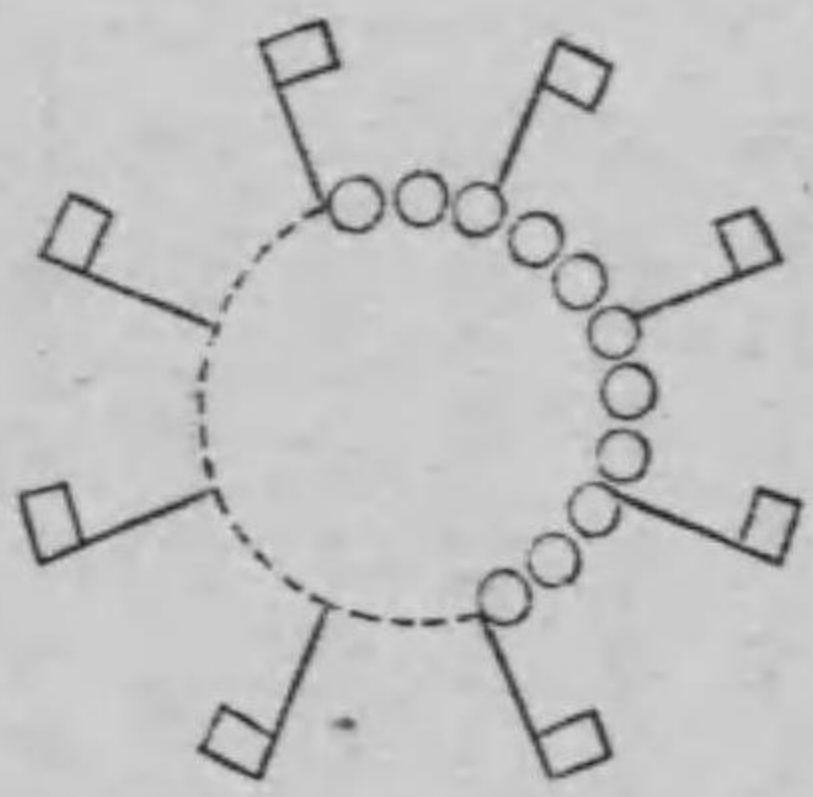
(一) 場取鬼



一、準備

赤白旗八本。小輪五〇

二、方法 旗を立て、圓形を作る。



全兒童兩手間隔の一行圓陣に並べ、内二三人を圓内に  
入れて鬼にする。而して圓兒童は人數を定めて旗と旗  
との間適當な位置に並ばせ自分を中心として地上に  
圓線を書かせ後圓の中心に進めて縦隊の圓形にする。  
全兒童唱歌を歌ひ圓形行進中教師の合圖が、又は止れ  
の號令で速かに近くの圓線内にはいる。此時圓内の鬼  
も一つの圓線を占領する。而して圓線内に入ることが出来なかつたもの  
は第二回目の鬼になる。

三、注意

(一) 小さい輪があれば、圓線の代りに之を置く。若し兒童數に不足するとき  
は兒童を二列圓形とし、其の列間に一個を置き二人で之を占領する。此場

合には前後列反對の方向に行進する。

(二) 二人で一個の輪を占領するときには先きに占領したものと手を取るば  
かりでもよい。

(三) 駈步行進間、輪の中に中心に向て停止間號令により一つ(二つ)右(左)に移る  
此外内方外方等種々の行進をさせる。

(四) 鬼は十五人に一人位の割合にする。而して鬼は一定の場所に停止しては  
ならぬ。

(五) 鬼も全兒童の列に加入して共に行進するもよい。

(二) 毬移

一、準備

大輪四個 大球二個

二、方法

全兒童を均勢の二組に分けて一線上に並ばせ各前方數十間の所に同距  
離に大輪を二個づゝ置き、片方の輪に大球一個づゝ入れて置く。



各一番は走り出て、球を片方の輪の中に移してかへる。次に二番も一番の如く走り出して球を元の輪に移して歸る。此のやうに順次行つて、最終兒童の早く整列線に歸つた組を勝にする。

三、注意

- (一) 大輪の代りに地上に線を引くか、或は繩旗竿等で球を置く位置を造るもよ。
- (二) 大球の代りに他のものを用ひるもよ。
- (三) 兒童多數の時は數組に分ける。

一、準備

全兒童を一列圓形とし兩手間隔を取つて圓の中心に向かせる。

二、方法

- (一) びい〜と  
拍手三回終りに兩手下垂する。  
兩臂側舉上振しつゝ右に向く。
- さへづる雲雀

轉りながら何處迄上る

兩臂側舉上振しつゝ圓形行進、終りに圓の中心に向き兩手を腰にする。

高い〜雲の上か

右手上下左手上下(高イ〜)  
右手上下左手上下(雲の上か)  
手を腰、右轉回をする。

聲は聞えて

見へない

手腰右足を一步引き上體を前屈する。

雲雀

右足を左足に引きつけ直立兩手下垂する。

(二) びい〜と

(一)と同じ

さへづる雲雀

兩臂側上振四回終りに兩臂を下垂する。

轉りやんで何處らへ落ちた

手腰右轉回前進圓形連手し蹲踞する。

青い〜

起立退歩終りに手を腰にする。

麥の中か

右足を前に出すと同時に右手の前方を指し終りに右足を左足に引きつけ手を腰にする

姿かくれて

上體前屈一回する。



見へない雲雀

拍手。

(四) 子殖鬼

一、準備

帽子男兒童數、襷女兒童數

二、方法

全兒童男帽子女襷一個づゝ持たせ場内に散亂させ内一人に帽子を被らせて鬼とする。

鬼に手を觸れられたものは男は帽子を冠り女は襷を掛け、鬼となつて直ちに他の兒童を捕へ鬼にする。此の如く行つて終りに残つた一人は第二回目の最初の鬼となる。

三、注意

(一) 鬼となるを喜ぶものがある、依て容易に鬼にさせぬ様迅速に逃げさせねばならぬ。

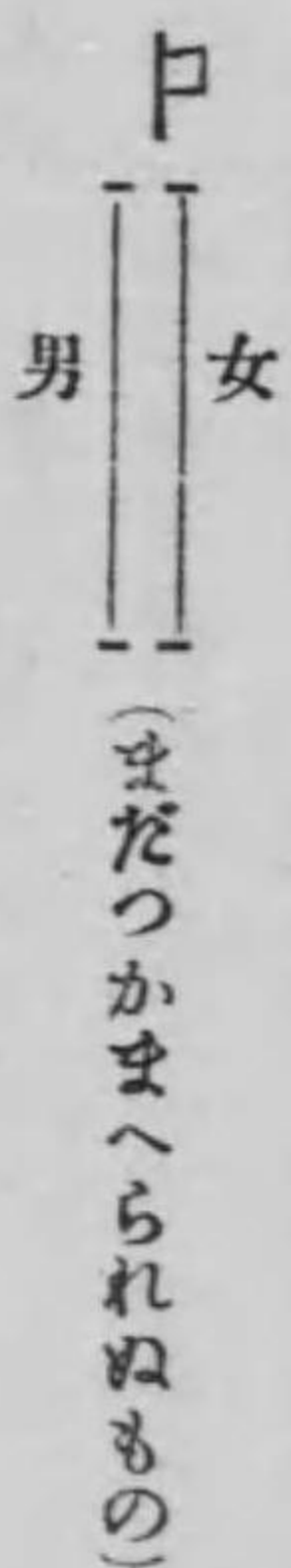
(二) 終つて兒童を笛で呼び集めて整列さす場合整頓を速かにさすこと。

(三) 鬼にならぬ最後の一人を残すまでには相當に多くの時間を要する。故に

二三回中止せしめては最もよく逃げた兒童をあげて獎勵する。

鬼女(タスキをかけたもの)

男(帽子を被つたもの)



(五) 輪潜り旗送り

一、準備

小旗二本、大輪六個

二、方法

均勢の二組に分けて一列横隊に一線上に並ばせ、各組外翼一番の前に大輪三個づゝを置く。而して教師は兩組の中央前十間位の處に兒童に對向して小旗を左右に一本づゝ持つ。



各一番は輪を三個潜つて、教師の側方に行き、片手に旗を受取つて高く舉げ、片手は教師と手を繋ぐ。此の如く二番以下順次に行つて最後のもの、早いを勝とする。

三、注意

- (一) 兒童數の多い時は輪を二つ又は一つとして組を多くしなければならぬ。但し三組以上のときは旗は一定の所に立て、置く。
- (二) 輪の數の少き時には一つの輪を數回潜らせねばならぬ。
- (三) 輪のない時には縄跳をする。
- (四) 第二回目は教師に旗を渡したる後、右の組は右に、左の組は左に方向變換をし、後輪の方に向つて縦隊となる。

(第二學期)

(一) 交換競走

一、準備

フットボール二個、小輪二個

二、方法

全兒童を均勢の甲乙二組に分けて、各二列に編成し、甲組の次に乙組を並ばせる。而して前後列の間を十間位にして相對向させる。兩組の各一番の前列は毬後列は輪を持つて中央に走り出て、毬と輪と取り換へて歸り、それを二番に渡す。二番以下順次に一番の如く行つて、最後のものが早く歸つた組を勝とする。

三、注意

- (一) 取り換へる品は布片、豆囊等何れでも差支へない。
- (二) 兒童數の多き時は組を多くせねばならぬ。
- (三) 中央の出會つた所で取り換へることなく、左手を取り一周して歸るも一法である。
- (四) 毬或は輪を正しく受け取るまでは場を離れないこと。
- (五) 列の亂れないため小さい輪を用ふるもよい。
- (六) 最後の者が自分の輪の中に着いたときは一齊に萬歳を唱へること。



(二) 浦島太郎

一、準備 二列圓形で相對向させる。

二、方法

昔々浦島は

助けた龜に連れられて

龍宮城へ来て見れば

繪にも書けない美しさ

乙姫様の御馳走に

鯛や比良目の舞踊

たゞ珍しく面白く

月日のたつのも夢の中

遊びにあきて氣がつきて、

一同拍手終りに兩手を下す。

二列側面圓形となり、内側の手を取る。

二列圓形行進。

一列圓形一步前進連手を舉げる。

兩臂を徐かに下しつゝ、一步後退。

前後列右手を取り廻轉終りに内方に向て一列圓形となる。

拍手終りに兩手を下す。

一同圓形連手蹲踞。

活潑に立ち内側生は外側生の前に出て對向する。

御暇乞もそこ／＼に

歸る送中の樂は

土産に貰つた玉手箱

歸つて見ればこは如何に

元居た家も村も無く

路に行き逢ふ人々は

顔も知らないものばかり

心細さに蓋とれば

あけて悔しき玉手箱

中からばつと白煙

たちまち太郎はお爺さん

(三) 二人鬼

一同徐かに禮をする。

二列側面圓形となる

兩臂を前舉掌を上に向けて圓形行進終りに兩臂を下す。

右生は右に、左生は左にまはつて對向する。

一同足踏をなす。

外生は内に内生は外に進んで右轉回をする。

舊位置に復する。

各蹲踞して兩手を前に出し蓋をとる眞似をする。

活潑に立ち各右に一周する。

活潑に兩臂を前方より上下する。

拍手



一、準備

帽子(男)五〇、襷(女)五〇

二、方法

全兒童帽子を懐にして二人づゝ手を繋ぎ、内一組を鬼として帽子を被せる。

鬼に手を觸れられたものは帽を冠つて鬼となり、直ちに他の組に觸れて鬼となさんとする。此の如く行つて最初に鬼となつた組は次回の最初の鬼とする。

三、注意

(一) 最初より鬼の組二組位にして、鬼に手を觸れられた組が鬼に代つて鬼となる。方法もよい。

(二) 鬼の組が手を放して他の兒童を捕へたのは無効とする。

(三) 鬼の一人は前の者の帯を握らしむる方がよい。

(四) 男女混合の組で男女別々に組を作る。

(五) 止めの號令で集合するときも二人づゝ手を連ねたまゝ元位置に集まる。  
(四) 友捕鬼

一、準備なし

二、方法

全兒童を二列圓形とし、片手間隔で内方に向かせ、内二三人を出し、圓の中心に置いて鬼とする。

前列は拍手後列は圓形行進をする。止まれの號令で後列兒童及中央の鬼は前列の前に入つて二列となる。而して入ることが出来なかつたものは次回の鬼になる。

三、注意

(一) 第二回目には前列であつた組が後列となる。

(二) 内圓兒童は拍手して唱歌を歌ふ方がよい。

(三) 鬼は中央に小圓を畫いて入らせるがよい。

(四) 鬼は外圓兒童と共に行進させるのもよい。



(五) 内圓兒童と外圓兒童との距離を適當にとること。

(第三學期)

(一) 西洋鬼

一、準備なし

二、方法

全兒童を二列圓形とし、片手間隔で圓の内方に向かはせ、内二人を圓列外に出して一人を鬼とし一人を子とする。

圓列外で鬼は子を捕へやうとする。子は鬼に捕へられない様に走り、二人伍の前に入つて三人となる。是に於て其の伍の最後の一人は子となり、逃げ廻はる。此くして鬼に捕へられた時は代はつて鬼となり、鬼は子となる。

三、注意

(一) 兒童多數の時は一組二十名位とし、數組に分け兩手間隔を取つて行はせる。

(二) 子は圓を一週する間に入ることが出来なかつた時は代つて鬼となる。

- (三) 鬼は圓の内外自由であるが、子は圓内を通つてはならぬ。
- (四) 子は鬼に捕へられた時は新な組を出すのもよい。
- (五) 三人列となつた時一步退いて圓の小さくならない様にせねばならぬ。
- (六) 鬼が疲れたるときは適宜の伍の前に入り、其の伍の最後の兒童を鬼とするがよい。

(二) 雪

一、準備

全兒童二列圓形として、兩手間隔を取らせる。

二、方法

(一) 雪やこんこ霰やこんこ 上を向き顔前で拍手、終つて兩手を下す。

降つては降つては 雨臂上下二回。

づん／＼積る 活潑に足踏。

山も野原も 雨臂を前から横に廻して下す。

綿帽かぶり 雨臂を圓く頭上に擧げる。



枯木残らず花が咲く

拍手足踏、終りに両手を下す。

(二) 雪やこんこ霧やこんこ

(一)と同じ。

降つても降つてもまだ降りやまぬ

(一)と同じ。

犬は喜び庭かけ廻り

右向行進。

猫はこたつで圓くなる

圓の中心に向て蹲踞する、終りに起立する。

三、注意

運動場の或區域内で、自由行進をなさしめ、適當の時停止せしめ、隨意の間隔で行はせるもよい。

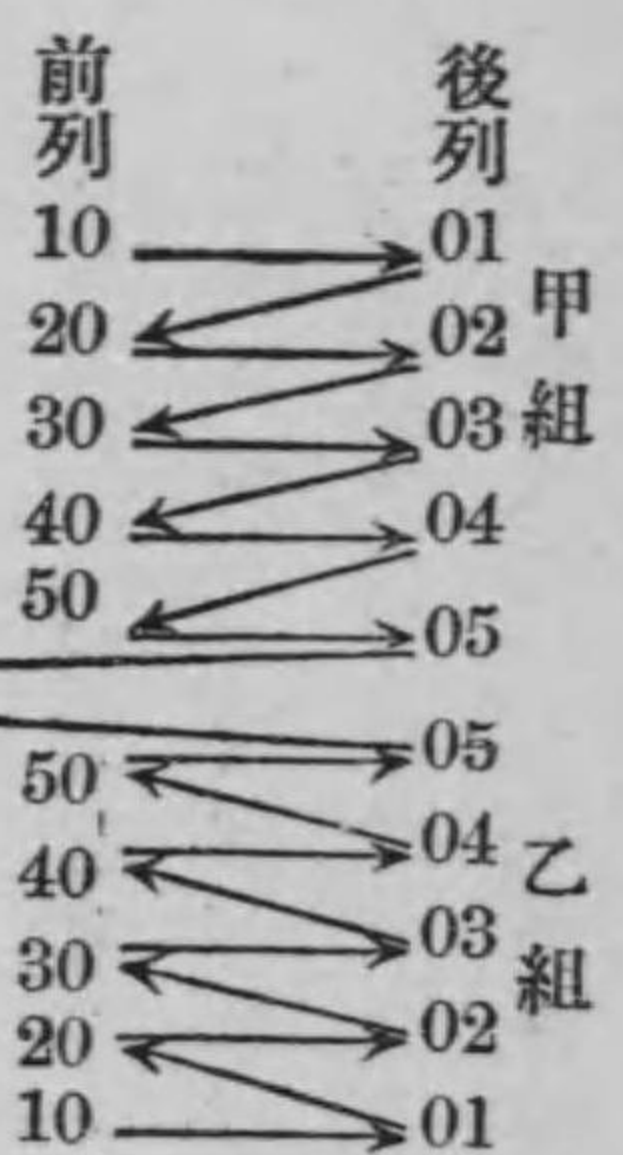
(三) 千鳥競走

一、準備

フットボール二個

二、方法

全兒童を均勢の甲乙二組に分けて、各二列に編成し、甲組の次に乙組を並ばせる。而して前後列の間を十間位にして相對向せしめる。



甲乙兩組の前列の一番はフットボールを後列の一番に渡して、其の位置に止まる。後列の一番は前列の二番に渡す。此の如く順次行つて、最後のものは教師に渡す。其の早き組を勝とする。

三、注意

(一)一回にて勝負を決せず、五回勝負位にするも興味がある。

(二) 兒童の多數の時は二組以上に分たねばならぬ。

(三) 熟練せば最後のものは教師に渡すことなく、再び一番に渡す。一番以下最初の如く行ふ。此の如く一順した後、最後のものは教師に渡す。其の早い組を勝とする。

(四) 教師の位置は各最終生から同じ距離の地を選定せねばならぬ。

(四) 帽子取毬奪



一、準備

帽子生徒數、毬赤白五個づゝ

二、方法

全兒童を均勢の二組に分けて、運動場の兩端に並べ、各組を攻撃隊と防禦隊とに分けて、帽子を被らせる。而して、各組整列線の後方に徑二間位の圓を畫いて、其の中に毬を入れて置く。

各組の攻撃隊は敵地に入つて、毬を一個奪はうとする。防禦隊は敵の攻撃隊の帽子を奪つて、攻撃力を失はしめやうとする。此くして敵の毬を全部早く奪つた組を勝とする。

三、注意

- (一) 兩組の距離及毬置場の大小は適宜斟酌する。
- (二) 攻撃隊と攻撃隊とは帽子の奪ひ合ひをしてはならない。
- (三) 防禦隊及攻撃隊は帽子を奪はれたときは味方の後方に退く。
- (四) 防禦隊は味方の毬置場にはいつてはならない。

- (五) 奪つた帽子は懐へ入れることに定め、投げ棄てゝおかないやうにする。
- (交換教材)

(一) 地球送り

一、準備

大珠二個

二、方法

全兒童を均勢の二組に分けて、各片手間隔の二列に編成し、甲組の次に乙組を並ばせる。而して前後列の間を成るべく廣くして、相對向せしめる。各組前列の一番は大珠を後列の一番に轉送する。次に後列の一番は前列の二番に次に前列の二番は後列の二番に、以下順次に行ひ、最後のものは教師の所に轉送する。其の早い方を勝とする。

三、注意

- (一) 兒童多數の時は二人がかりにて轉送する。
- (二) 各前後列の中央前に毬置場の圓を畫き、球の受け渡は其圓内とするもよ



5.

(三) 球を轉送する際勢ひに乗じて球の上に乗ることがある。よく注意せねばならない。

(二) 蛇行競走

一、準備

1. 旗二本

2. 全兒童を二分し五六間を隔て、同方向に一行縦隊にして、各前者の帶を握らせる。而して各列十四五間の所に旗を一本づゝ立てる。

二、方法 各列前方なる旗を廻つて、早く元の整列線に歸つた組を勝とする。

三、注意

(一) 兒童の多數の時は二組以上に分ける。

(二) 帶を握るか或は手を連ねる。

(三) 各列身長順にして左翼先頭とする。

(四) 途中で手繫の切れた時は速に繋ぐ。決して切れた儘で走つてはならぬ。

(五) 旗をしつかり立てること。

(六) 旗を倒さないこと。

(七) 旗の代りに一兒童を立たせるもよい。

尋常科第三學年

(第一學期)

(一) 踵趾運動

一、準備 なし

二、方法 全生を二列圓形として、前後列相對向せしめる。

(一) 八呼間 手腰右足から踵趾運動。

(二) 八呼間 前後列圓るく手を取り、左方から一回轉をする。

以上を繰り返す。

三、注意

熟練すれば左方から一回轉の後少し左に進んで、對向生を換へて、第二回目を行はせる。



(二) 圍み破り

一、準備

1. 旗二本

二、方法 全兒童を均勢の二組に分けて、各圓形を作り、一番から六人敵の圓内に入らせる。

敵の圓内に居る六人は敵の連手の上を越え、又は下を潜つて、味方にかへり、味方の圓生に加はらんとする。此くして半數の三人だけ敵の圍みを早く逃げ出せし方を勝とする。

三、注意

- (一) 敵の圓内より逃げかへる人數と、圓内に入る人數とは適宜増減する。
- (二) 圓列生は位置を動いてはならない。
- (三) 圓内生は外に出ようとして、圓生の連手を切つてはならない。
- (四) 次回には七番から敵の圓内に入る。
- (五) 一回毎に勝負を決せず、半數又は全部逃げ出せば、其の組のみ次番六人敵

の圓に入る。

此の如く順次行つて、最後の組の早く逃げ出せし組を勝とするもよい。

- (六) 敵の圓外に居て、始めの號令で圓内に入り、圓内に立て、ある敵の旗を高く擧げることの早い組を勝とするも變化があつて面白い。

(三) 大繩跳

一、準備

長さ十二尺の跳繩二本

二、方法

全兒童を均勢の二組に分けて一線上に並ばせ、其の前方四五間の所で各一筋の繩の兩端を二人のものに持たせる。

用意の號令で二人のものは繩を大きく廻はし始める。始めの號令で各一番より順次繩に跳び込み、三回づゝ跳んで先方に抜け出で、反對の側に整列する。若し跳び損じたるときは跳び直しをする。此くして最後のもの、早く跳び越へた組を勝とする。



三、注意

- (一) 生徒多數のときは繩の數を増加するか、又は一度に二人づゝとばするもよい。
- (二) 繩を一回も跳ばずに繩の下を潜り抜ける事の早きを勝とするもよい。
- (三) 各組繩の兩側に並ばせ、各前列の一番は繩を一回飛んで後列の一番にフットボールを渡す。後列の一番も繩を一回跳んで二番の前列に渡す。最後のものは教師に渡す様にするもよい。
- (四) 放課時間等には一組で行ひ、失敗したるものは繩を廻させ順次交代する。

(第二學期)

- (一) ●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●

一、準備なし

二、方法 一列圓形で中心に向ひ二の番號を附する。

- (一) 八呼間 連手四呼間内進、四呼間足踏。
- (二) 八呼間 四呼間後退、四呼間足踏。

(三) 八呼間 (一) 拍手、(二) 手腰右へ側歩一步、(三) 同上、次に(五)(六)(七)(八) 同上、左へ二歩。

(四) 八呼間 一番二番右手ターン。

(五) 八呼間 左手ターン、終りに一番二番圓の内外で二列となりて手を腰にとる(一の番號は外側)

(六) 二列圓列行進終りに圓の中心に向ひ外側生は内側生の右に出て、もとの一列圓形となる。  
以上 繰り返へす。

(備考「ターン」とは兩人手をとりにて回轉すること。

- (二) ●●●●●●●●  
●●●●●●●●

一、準備

帽子兒童數(女子は襷)

二、方法 全兒童を均勢の甲乙二組に分けて、甲組に帽子を被らせる(女子は襷をかけさせる)而して兩組共各自使用の手拭又はハンカチ又は赤白の紐



を後の帯に着けさせる。

甲乙互に敵の手拭を全部早く抜き取つた組を勝とする。

三、注意

- (一) 後はとられても知らずに居ることがあるから、取られたことがよくわかる様に背でもたゝかせること。
- (二) 手拭は抜き易くすること。若し帯に結び着けるものあるときは危険である。
- (三) 帽子のない時は白赤の袴を着けさせる。
- (四) 帽子及袴等のない時は兩方共一列縦隊とし、前者の帯を握らしめ、先頭生は敵の後尾生の手拭を取る。敵に手拭を奪はれたものは先頭生となる。此くして全部手拭を奪はれた組を負けとするも可。
- (五) 兩方共五人位づゝを一組として前者の帯を握り、後尾生のみ手拭を着け、先頭生は帽子又は袴を以て目標として敵の手拭を奪はうとする。若し後尾生手拭を奪はれたときは五人共退場するも可。

(三) 巴競走

一、準備

布片又はフットボール三個

二、方法

全兒童を均勢の三組に分け、甲組の次へ乙組、次へ丙組を並べて、一列の大圓陣を作る。而して各一番に布片を持たせる。各一番は先づ味方から外圓を一周して、布片を二番に渡す。二番以下順次一番の如く行つて、最後のものは布片を中央なる教師に渡す。其の早い組を勝とする。

三、注意

- (一) 廻るには必ず味方を先にする。
- (二) 敵を追ひ越すときは必ず外側を走る。
- (三) 次番に布片を渡したときは、直に列に加はる。列の外側に居るときは、走者に衝突することがある。



(四) 兒童多數の時は二つの圓を作るか、或は三組以上に等分して一度に數人走ることにするもよい。

(第三學期)

(一) 旋風競走

一、準備

紅白の帽各二十五(女は襷)紅白の旗各二本

二、方法

紅白四本を約五間平方の位置に紅白交互に立てる。

全兒童を均勢の二組に分け、紅白の帽子を被らしめ、更に兩組各二等分して旗の處に集め、初めの號令で紅白共に四本の旗を同方向に向つて走らせて、互に敵を捕へ合ふ、而して捕へられたるものは列外所定の場所に整列する。斯くして多く捕へたる組を勝とする。

三、注意

男又は女のみ、の學級にあつては旗を四本立つる。又男女合併の學級にあ

つては旗を八本立て、内圓を女、外圓を男に走らすがい。

(二) 四色旗

一、準備

旗八本、毬或は棒四

二、方法

全兒童を四等分して各一番に布片を持たせる。而して教師は場の中央に位置し、其の四方に各組縱隊に並ばせる。而して各組の前後に旗を立て、置く。

各一番は敵三組の後方を廻つて布片を二番に渡す。二番以下順次行ひ、最終のものは一周の後中央なる教師に渡す。其の早い組を勝とする。

三、注意

- (一) 互に對向の組を味方として、半周して對向生に渡すことも一法である。
- (三) 蛇行切れ物送り

一、準備



布片五旗五本

二方法

全兒童を均勢の二組に分け、更に各組を五列縦隊に編成して兩組相對向させ前後左右に兩手間隔を取らせる。(全兒童五十人ならば一列五人宛)而して片方の組の先頭生五人に布片を持たせる。

布片を持つて居る一番は對向せる五人を蛇行して其の後方に通り抜け、直に一直線に歸り、二番に布片を渡して其の列の最後に附く。各二番は一番の出發した後、一番の空位に進んで一番の歸るのを待ち、布片を受け取つて一番の如く、行ふ。此くして最後の五番の早い組を勝とする。次に對向せる反對の組に行はせる。

三注意

(一) 此の運動は全生の半分づゝ運動をなし、残りの半分は旗の代りをするものであるから、運動者に有利或は不利にならぬ様、直立の姿勢を執らせること。

- (二) 對向者の距離は約五間とする。
- (三) 連手の下をくゞるも一法である。

(交換教材)

(一時争)

一準備

小輪五〇

二方法 二三人を列外に出して雀とする。残を横隊又は圓形に並べ、各兒童自己を中心に地面に圓形を畫かせる(小輪を置く方可)。

全兒童横隊、縦隊又は圓形に唱歌を歌ひつゝ、行進する。此時雀も列生と共に進行する。教師の「カヘレ」の號令で速かに圓形内に駆け入ることを努める。此時圓形内に入ることできなかつたものは次回の雀となる。

三注意

(一) 圓形で行ふときは圓の外方に向つて前進せしめ、急に返れの號令を下すもよゝ。



(二) 一個の圓形内に二人這入つたときは其の二人を雀とする。

(二) 輸送

一、準備

フットボール二個、旗二本

二、方法 全兒童を均勢の二組に分け、五六間を隔て横隊で相對向せしめる。而して兩組共列の兩翼に旗を一本づゝ立て、各一番にフットボールを持たせる。

「始め」て各一番は前(兩列の間)から反對翼の旗を廻り味方の後から味方を一周して、フットボールを二番に渡す。二番も一番の如く走り兩翼の旗をまはつて、三番に渡す。此の如く順次行つて、最終のものは教師に渡す。其の早い組を勝とする。

三、注意

- (一) 各自列を亂さない様に注意せねばならない。
- (二) 生徒數の多いときは、三組四組とするもよい。

尋常科第四學年

(第一學期)

(一) 四季の友

一、準備

二列圓形の側面縱隊に並ばせる。

二、方法

- (一) 八呼間 通常歩を以て圓形行進。
- (二) 八呼間 右生は連手を放さず頭上に舉げて左生を廻はる。
- (三) 八呼間 通常歩。
- (四) 八呼間 左生は連手を放さず頭上に舉げて右生を廻はる。
- (五) 八呼間 通常歩終りに前後列相對向する。
- (六) 八呼間 前列は後列の後に後列は前列の後ろに右方より進み、一周して舊位置に復する。
- (七) 八呼間 (一) 兩手を以て兩股を打つ (二) 各自胸前にて拍手をなす。



- (三)と(四)各自掌を前に向けて對向生と掌を合すこと三回次に(五)(六)は(一)と
- (二)の動作をなし(七)(八)は(三)と(四)との動作をなす。
- (八)八呼間 列後の方の手を連れ一回轉してもとの隊形となる。

以上繰り返す。

(二) 吶喊

一、準備

旗三四本、帽白廿五 赤廿五 白廿五 赤廿五(女)

- 二、方法 運動場の周圍に赤白青等の旗を立て置き、全兒童を一定の所に集合させる。

教師の合圖「赤旗(白旗)(青旗)」と指示する。全兒童其の旗の下に聞の聲を上げて走り、先頭第一のものは其の旗を高く擧げ、次の合圖で更に次の旗の下に集らせる。

三、注意

- (一)旗は高い所又は樹木等の所に立てる方がよい。

- (二)最初全兒童を二組に分けて各色帽を被らせ數回吶喊した後旗を擧げたものゝ多い組を勝とするも一法である。

- (三)全兒童が旗の線に來てから次の合圖をする。

(三) タッチボール (ボールサワリ)

一、準備

フットボール二個

- 二、方法 全兒童を一列圓形とし、内方に向はせ、内一人を圓内に入らせる。而して圓を作る兒童に「フットボール」一個を持たせる。

圓兒童はボールを隣者に渡すか或は轉轉して内圓兒童にさわられない様に圓列兒童に渡さうとする。内圓兒童は圓の内外何れでも便利な所に行つてボールに手を觸れやうと努める。而して内圓兒童が手を觸れたならば其の以前ボールを投げた圓列兒童が代て圓内に入る。

三、注意

- (一)全兒童を二組に分けて競争させるのも一法である。



(二) 圓兒童をして成るべく圓を亂さない様にさせる。

(第二學期)

(一) 水車

一、準備

二列圓形にして二の番號を附し、其の儘右に向き二列側面縱隊となる。

二、方法

(一) 八呼間 手腰左足より踵趾運動。

(二) 八呼間 通常步圓形行進終りに一番のみ後ろに向き、一二番十字に連手。

(三) 十六呼間 右手ムリネ、左手ムリネ、終りに一番は元の向きとなる。

以上を繰り返す。

三、注意

熟練すれば第二回目には第二番は後ろに向きて十字となる。

(二) 隧道

一、準備

紅白布片各二個

二、方法 全兒童を甲乙の二組に分けて、各二列縱隊とし、前後列對向して片手を取つて門を作る。而して甲乙の組は二間位隔て、相並行させる。

各組の一番二人は連手の下を潜り抜け、兩方に分れて舊位に復し、持つてゐる布片を二番に渡す。二番も一番の如く三番の門下から最後まで潜り、左右に分れて歸へり、一番の門下を潜りて舊位に復し、布片を三番に渡す。三番も最後まで潜つて歸り、一二番を潜つて舊位に復し、四番に渡す。順次此の如く行ひ、最後のものは教師に渡す。其の早い方を勝とする。

三、注意

(一) 兒童多數の時は三組以上にしてもよい。

(二) 各組の兩翼に旗を立て、それを廻らせるもよい。

(三) 最初の位置を亂さない様にする。

(三) 帽子取俵奪

一、準備



赤白帽兒童數俵二個赤白旗二本宛、

二方法 全兒童を二分して運動場の兩側にたてた赤白旗の線上に並ばせ、帽子を被らせる而して各列の後に俵を一個づゝ置く。

各敵に帽子を奪はれない様に敵地に侵入して、敵の俵を奪つて味方の陣地に運ぶ。若し敵に帽子を奪はれたる時は速に味方の陣地に歸つて、一定の場所に整列する。

三、注意

- (一) 俵一個の時は兩組の中央に置く。
- (二) 最初より攻撃隊と守備隊とに分けて置くのも一法である。

(第三學期)

- (一) ●●●●●●●●
- 

一、準備

フットボール一個

二方法 全兒童を二分して甲組は圓形手繋をなし、乙組は甲組の圓内に悉く

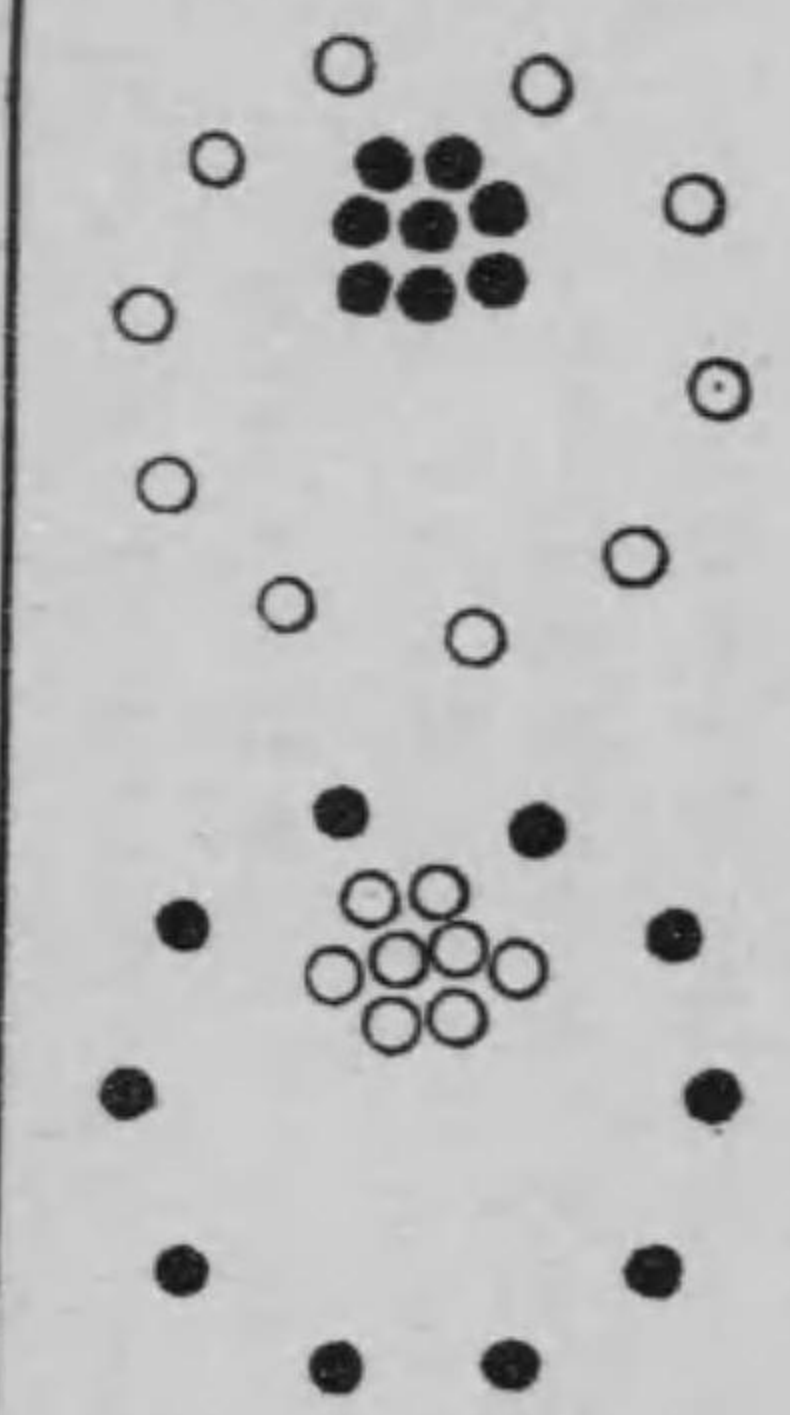
入れる。而して圓列兒童にフットボール一個を持たせる。

二、方法

始めの號令で圓列兒童は圓内兒童にボールを投げつけ、内圓兒童は巧にボールを通れやうとする。内圓生で毬にあつたものは圓外に出る。此の様にして悉く(デット)となるまでの時間を計り置き、次に内外兒童交代して行ひ其の時間の短い方を勝とする。

三、注意

- (一) 攻撃者は圓内で投げることは出来ぬ。
- (二) ボールが圓外に出た時は圓列兒童は速かに拾つて来る。
- (三) 兒童多數の時は時間を一定してデットとなつた人數の多少によつて勝負を決するがよい。
- (四) 敵味方を各二組に分けて味方の半數が敵の圓内に入り、何れか全滅する迄競争





させるのも一法である。

(二) 一脚競走

一、準備

足を縛る布片兒童の數

二、方法 全兒童を一列横隊とし、各兩足を一つに縛らせる。

始めの號令で兩臂を前又は後口より圓く振りながら、一足跳びに所定の地に競走させる。

三、注意

(一) 兒童多數の時は數組に分けて行はせる。

(二) 十間位の處を往復させるもよい。若し十間以上の時は片道は足を解いて歸らせるがよい。

(三) 足の何の邊を縛するかを一定するがよい。

(三) 手繫鬼

一、準備

帽子兒童數

二、方法 全兒童を赤白の二組に分ちて帽子を被らせ、各組五人づゝの手繫鬼を三組づゝ作り、他は逃手となつて、隨意運動場に散亂させる。

各組の手繫鬼は敵の逃手を捕へ、味方として手繫の内に加へる。此くして敵の逃手を早く捕へ盡した組を勝とする。

三、注意

(一) 逃手は鬼の手下を潜り抜けるのは差支ないけれども鬼の連ねたる手を切つてはならぬ。

(二) 次回には鬼であつたのを逃手として行ふ。

(三) 敵に捕へられた時は帽子を脱ぐ。

(交換教材)

(一) 人捕

一、準備なし

二、方法 全兒童を甲乙に二分して運動場の兩側に集合させ、各集合地の前に



一線を引いて味方の陣地とする。  
 甲組の一人は乙組の前に近く行く。乙組の一人は之を捕へやうとして陣地より出て追ひかける。甲組の他の一人は之を又捕へやうとする。此の如く自分より先きに陣地を離れたものを捕へやうとして、出發し、其の敵に手を觸れたら捕虜として味方の陣地に連れて来る。若し捕へることの出来ない時は一旦陣地に歸る。

三、注意

- (一) 最初捕虜が何人出来たら勝ちと約束して置く。
- (二) 捕虜は敵陣の線内に片足を入れ、手を伸ばして救を求め、味方のものは敵の捕虜とならぬ様にして之に手を觸れ、味方に連れ歸る。
- (三) 捕虜數人の時は、内一人は敵陣に片足を入れ、他は皆手繋をして、味方の方へ近く手を延ばす。
- (四) 自分より先きに陣地を離れた敵を捕ふるはよいけれども、後に出た敵を捕ふることは出来ぬ、故に目指す敵は陣地に歸れば自分も一旦陣にかへ

る。

(五) 敵に追はれて危険なときは敵陣に走り込み、敵の隙を見て逃げ歸る。

一、準備

フットボール二個

二、方法 全兒童を二分して各一列縦隊とし、先頭の兒童は二間を隔て、相對向し、全兒童を一線上に並ばせる。而して先頭兒に一個のフットボールを持たせる。

二、方法

各先頭生は毬を頭上より順次後方に送る。最後の兒童は毬を受取ると同時に、よしと高聲に叫び、直ちに方向變換をして組の先頭兒となる。其の他のものは駆歩で其の後方に行き、前者より送つて来る。毬を後方に送る。此の如く四回行つて、舊位置に復し、最後のものは毬を教師に渡す。其の遅速によつて勝敗を決する。



三、注意

- (一) 毬は頭上、體前等種々に變へて送る方がよい。
- (二) 兒童多數の時は組數を多くする。
- (三) 送るものは旗、棒等何でもよい。

尋常科第五學年

(第一學期)

(一) 氷舞

一、方法

二列圓形縱隊に集め、右手と右手、左手と左手とを體前に取り、初めて次の運動をする。

- (一) 八呼間 右足から二歩の後置歩。
- (二) 八呼間 右足から弧形氷滑歩。
- (三) 八呼間 セット。
- (四) 八呼間 右手の跳歩回轉。

以上繰り返す。

二、注意

熟練すれば最後の跳歩回轉を止めて、(一) 足を上げ、(二) 踏付く、(三) (五) (七) は足を上げ、(四) (六) (八) は踏み付ける様にする。

(二) 棒取

一、準備

用具 棒(赤白各生徒數の半分宛)

二、方法 兒童を二分して、各組二人づゝ、手繋をなさしめるか、或は後者に前者の棒を握らしめ、後者には棒をかけしめる。

各組の前者は敵の後者の棒に手を掛けんとする、各後者は敵に棒を握られざる様に前者の後にかくれて前者の行動に従ふ。若し棒を握られた時は、死者として棒を取つて所定の場所に整列する。斯くして全部死者とせしめた組を勝とする。

三、注意



- (一) 勝敗は死者の組數の多い方を敗とするも可。
- (二) 組を作らず各個人で行はしめるのも可。
- (三) 後者は敵の櫛を取ることは出来ない。
- (三) 騎馬帽子取

一、準備

用具 帽 赤一〇〇

二方法 全生を二分して二組とし、各組四人又は三人で馬を作つて、一人はそれに乗る。斯くの如く兩組共悉く騎兵として乗者に帽子を被らしめる。各組に大將を一名づゝ置いて、其の命令により行動する。若し落馬した時は其の場で乗るか、又は危険界を脱して乗馬し、再び出陣する。斯くして敵將の帽子を奪つた組を勝とする。

三、注意

- (一) 騎兵の人數が端數の時は二人又は三人の馬で一人乗らしめる。
- (二) 帽子を奪はれた時は、所定の所に一列に整列せしめること。

- (三) 馬は帽子を奪ふことは出来ない。
- (四) 乗者は其の組で一順する様にする。
- (五) 三人にて馬を作る時は身長者を先頭にする方がよい。

(第二學期)

- (一) 對列フットボール

一、準備

用具 フットボール一個

二方法 全生を二分し十間位を隔て、相對向させ、更に各組を三四列の横隊に分け各隊はそれ／＼手を繋ぐ。

兩組の中央にフットボールを一個置いて、始めて兩組の第一列は前進して、ボールを蹴つて敵の連手の上、又は下を通過して、敵の列後に送らんとを努める。ボールを列前で留めることが出来なかつた組は負として、後方に退き、第二列生は進んで敵を攻撃する。此くの如く行つて敵の最後列の後方にボールを通過せしめた組を勝とする。



三、注意

- (一) ボールが側方列外に出た時は中立者は拾つて来て、其の出た點で高く投げること。
- (二) ボールには決して手を觸れてはならない。
- (三) 各組に大將を一名づゝ置いて號令を以て進退せしめるも一法である。

一、準備

用具足を縛る紐(生徒の半數)、布片二個

二、方法 全生を二組に分けて、一線上に並べ、各前後列の間を十間位とする。而して二人づゝ内側の足を縛らしめる。

各組前列の一二番は後列の一二番の所に行つて持つて居る布片を渡す。後列の一二番は前列の三四番に渡す。斯く順次行つて最後のものは教師に渡す。其早い方を勝とする。

三、注意

- (一) 全生を片側に整列せしめ、各組は前方の旗を廻はつて歸らしめるのも一法である。
- (二) 足の縛り方は高過ぎたり、緩る過ぎたりしないやうに一定すること。殊に緩る過ぎると歩調を合すことがむづかしい。

(第三學期)

(一) 捕鯨遊

一、準備

用具赤白帽(生徒數)

二、方法 全生を赤白の二組に分けて各横隊に連手せしめる。而して各々帽子を被らしめ各組から一人づゝ出して鯨とする。

敵の鯨を手繫の内に圍むことの早き方を勝とする。

三、注意

- (一) 鯨は連手の下を潜り抜けないう様又連手を切らない様にする。
- (二) 各組から勢子一人づゝを出すも一法である。又は捕鯨船を二艘三艘と人



數に應じて作るも一法である。

(二) 御手玉競走

一、準備

用具 手毬約兒童數

二、方法 兒童を十人位つゝ數列に並ばしめ、出發點と決勝點とを定めて置く。第一列は横隊で片手間隔に整列して、各自二個の御手玉をうけつゝ走つて決勝線に早く到着したものを勝とする。次に第二列第三列といふが如く行つて夫々競走せしめる。

三、注意

- (一) 途中で落した時は走るとを止めて、拾ひ取り、再び始めること。
- (二) 人數は適宜斟酌すること。
- (三) 生徒を十間位隔てしめて相對向せしめ、千鳥に競走せしめるのも一法である。

(三) 陸戦

一、準備

用具 白赤帽各二五個、小旗二

二、方法 全生を赤白の二組に分けて帽子を被らしめ、更に各組を騎兵と歩兵とに分けて騎兵の内一人を大將とし旗を持たしめる。各組騎兵と歩兵と一致協力して、敵に帽子を奪はれない様にし、敵の大將を襲撃して其旗を奪ひ取ることに早き方を勝とする。

三、注意

- (一) 敵に帽子を奪はれた時は、直ちに所定の場所に退去すること。
- (二) 騎兵は落馬した時は再び乗るか、或は歩兵となること。
- (三) 騎兵が帽子を奪はれた時は他の歩兵が乗馬するも差支ない。
- (四) 敵を防ぐ爲め自分の帽子に手を掛けることは出来ない。
- (五) 歩兵の内から隊長一名を選び出して、裨をかけしめ、歩兵を指揮せしめる、隊長が若し戦死した時は他のものが之に代はること。

(四) 飛行機



一、準備

用具 紅白の帽子五個宛

二、方法 生徒を紅白の二組に分け、各組に七の番號を付け、一番から五番まで連手、六番は三番の、七番は六番の帶を後ろで握る。而して七番のみ帽子を被らしめる。

一番の右手五番の左手で、敵の七番の帽子を奪ひ取らんとする。七番は六番の後ろで敵に帽子を奪はれない様にして前者の行動に従ふ。若し帽子を奪はれた時は所定の場所に退いて整列する。斯くして早く敵の帽子を奪ひ盡した組を勝とする。

三、注意

- (一) 飛行機の左右翼二人の外は敵を攻撃することは出来ない。
- (二) 味方の連手が切れた時に奪つた帽子は無効である。
- (三) 一組の人数は適宜増減すること。
- (四) 女子は帽子の代りに七番に、おつぼをつけさせばよい。

(交換教材)

(一) 障碍物競走

一、準備

用具 鐵棒、繩張、水平棒、輪漕り、庭球網、片脚跳、後向駢歩。

二、方法 全生を身長順に七八名づゝに分ける。

障碍物は据付器械等を利用し、且つ格別準備を要せないものを適宜に配置し、七八名づゝ通過せしめ、尙樹木等を廻はつて出發點に歸らしめる。

三、注意

- (一) 障碍物は平均臺上の駢歩、或は棒跳等の如き危険なことは避けること。
- (二) 器械が小數で、一回の生徒數が多い時は先を争つて怪我をすることがあるから注意せねばならぬ。
- (三) 一學級五十人とすると、五人を一組として十組に分け、各組の一番十名は規約の障碍物を通過し、途中で毬を一個拾ひ歸へる。次に二番十名が一番の如くして、順次行つて最後の五番早かつた組を勝とするも一法である。



(二) 8字競走

一、準備

用具毬二個

二、方法 全生を二分して、各一列圓形を作らせて内方に向かしめる。而して各一番にボール又は布片を持たせる。各組の一番は敵の圓を一週し、次に味方を一週ししてボールを二番に渡す。二番以下順次行つて、最後のものは教師の所に持つて來る。其れが早き組を勝とする。

三、注意

- (一) 兩組の間を十間位にすること。
- (二) 生徒多數の時は全生を二分して二ヶ所で行はしめるか或は二人に手を繋いで走らしめること。

尋常科第六學年

(第一學期)

(一) 大正行進

一、準備なし

二、方法 二列圓形の側面縱隊に並ばせる。

- (一) 八呼間 通常歩で圓列行進。
- (二) 八呼間 外足及び内足で、跳歩を以て、舉手踵趾歩。
- (三) 八呼間 外方及び内方へ側方後置歩一步跳歩一步。
- (四) 八呼間 對向先頭の方へガロツプ。
- (五) 八呼間 内方へ跳歩を以て。

(1) 臂側舉一脚前出、一脚半屈膝。

(2) 直立。

(3) 以下同上。

(六) 八呼間 外方へ同上四歩。

(七) 八呼間 跳歩を以て「セツト」。

(八) 八呼間 跳躍旋回。



以上を繰り返す。

(備考)

- 跳歩 跳躍しつゝ前進す。
- 踵趾歩 踵と趾と交互地につく。
- セツト 弧形に右へ三步左へ三步。
- 跳躍旋回跳歩を以て回轉する。

(二) 俵運

- 一、準備 俵二個(一個の目方約四貫)
- 二、方法 全兒童を二組に分け、各組を前後列二十間位の距離に相對向させる。而して各前列一番の前に俵を一個づゝ置く。各一番は「始め」の號令によつて、俵を擔いで後列の一番に渡す。後列の一番は前列の二番に渡す。二番は後列の二番に渡す。かやうに順次に送つて最終生は教師の所に運ぶ。其の早い方を勝とする。
- 三、注意

- (一) 生徒が多數の時は俵を三個とし、三組に分けるがよい。
- (二) 女子は8字競走の方法で行はせるも一方法である。
- (三) 俵の渡し方、受け方に注意をさせることが必要である。

(三) 繩跳

- 一、準備 一人跳の繩十筋。
- 二、方法 全兒童を甲乙の二組に分け、運動場の兩側に向ひ合つて兩手間隔の二列横隊に並ばせる。  
甲組の前列は各繩を以て片脚跳をし、乙組の所に行つて其繩を乙組の前列に渡す。乙組の前列は同様片脚跳をして甲組の處に行き、甲組の後列に渡す。甲組の後列は乙組の後列に渡す。
- 三、注意
  - (一) 甲乙共、其の中央から折半し、敵味方に分けて競走的に行はさせるのも一方法である。
  - (二) 繩の一回轉に何歩と約束するがよい。



(三) 繩を受取つたならば其の場から跳び始めるがよい。

(第二學期)

(一) 海戦

一、準備 帽赤白各五、小旗赤白各二、

二、方法 全兒童を紅白の二組に分け、各組五人づゝ前者の帶を握つて一軍艦となり、中央のものを艦長として、これに帽子を被らせる。而して各組に一名づゝの司令官を置き指揮旗をもたしめる。

各組の司令官は指揮旗で味方を指揮し、敵艦の帽子を奪はさせる。帽子を奪はれた時は、速かに所定の所に退却する。

戦闘中帶をはなしてきれたる組は沈没したるものとして同じく所定の所に退却する。

かくして敵艦を全滅させた組を勝とする。

三、注意

(一) 軍艦の人員は適宜定むるがよい。

(二) 個人に活動する水雷艇を設くるも一方法である。

(三) 司令官は、敵を攻撃することは出来ない。

(四) 帶を握ることをやめて、手繋ぎするのもよい。

(五) 軍艦の先頭者の外は敵の帽子を奪ふことが出来ない。

(二) 頭上毬送り

一、準備 フットボール、或は徑一尺位の毬二三個

二、方法 全兒童を二分し、五間位を隔て、一列縦隊に並行して並ばせる。而して先頭兒童にボールを一個づゝ持たせる。

各一番から頭上にボールを舉げて、後方に送る。最後のものはボールを受取り、組の側方を走つて先頭となり、再び頭上から送る。かやうにして、一順の後各一番は教師に渡す。その早い方を勝とする。

三、注意

(一) ボールを頭上から落した時は、早く拾つて来て舊位置から再び送ること。

(二) 各兒童一步の距離を存せしめて、ボールを頭上から後方に手渡しするも



一方法である。

(第三學期)

(一) フットボール

一、準備 六號ボール一個。

場所六十間に四十間の割合。

門四間高八尺。

二、方法 全兒童を二分して紅白の帽子を被らせる。

ボールを中央に置き、兩組の「キャプテン」が拳をなし、勝つた方から蹴り始める。

規則

(一) 始めの合圖をする迄は兩組共ハーフラインを越えてはならぬ。又蹴り始めぬ組はサークル内に入つてはならぬ。

(二) 人員の配置

(イ) ゴールキーパー 十一分の一

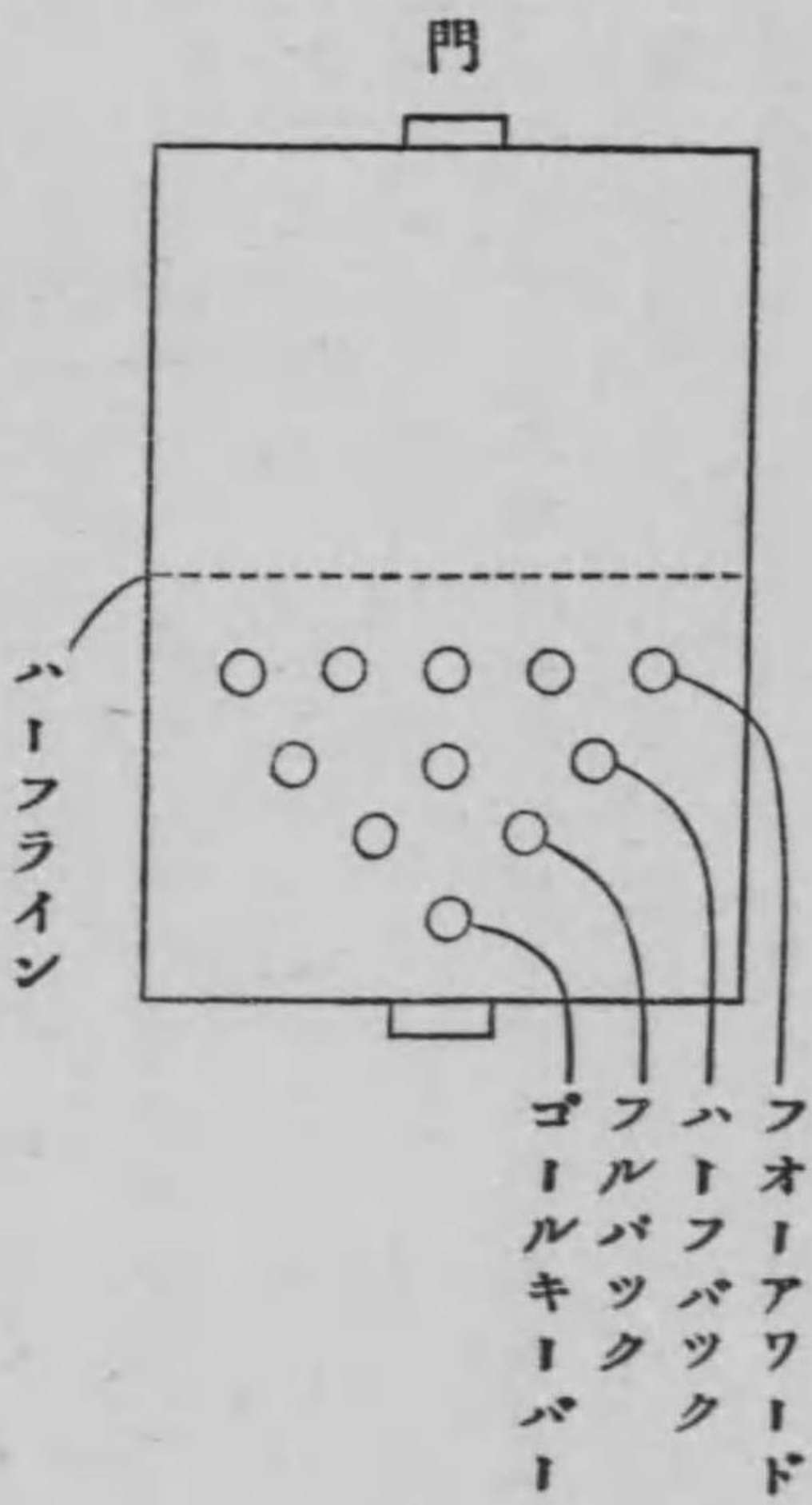
(ロ) フルバック 十一分の二

(ハ) ハーフバック 十一分の三

(ニ) フォーアワード 十一分の五

(三) ゴールキーパーの外は、ボールに手を觸れさせてはならぬ。

(圖のル-ポトツフ)



(四) 紅白組が白(紅組)の門内より蹴り出した時は紅(白)の勝とする。

(五) 紅(白)組が白(紅組)の門以外の點で外に蹴り出した時は白(紅組)の一人はボールの出た點で足を揃へ、跳び上らない様にして兩手で頭上から隨意の



方向へ投げる。此時投入者は直に蹴つてはならぬ。

(六) ボールに手を觸れた時は其點で敵をして隨意に蹴らせる。

三、注意

(一) 人數の割合は適宜斟酌するがよい。

(二) 各任務を重んじ、ボールの所に集りて押合をしてはならぬ。

(二) 二人縄跳

一、準備 二人跳繩二筋

二、方法 全兒童を二組に分け各組を二列横隊に並ばせ、更に各組の前例のみ

十四五間前進させて、前後列の間を廣くする。而して各組の前例一番と二番を一伍とし、二人跳繩一筋を持たさせる。

各組の一、二番は外側の手に繩を持ち、内側の手を相手の肩にかけ、片足跳をして、後列の一、二番の所に至り、其位置に止つて繩を渡す。後列の一、二番は前列の如く行つて、前列の三、四番の所に行く。斯くの如く順次に行つて最後のものゝ早いのを勝とする。

三、注意

(一) 繩の一回轉に何歩と約束するがよい。

(二) 繩を受取れば其場から跳び始めること。

(三) 數組に分けて前方の旗又は樹木を廻らさせるか、或は圓形で行はしむるか、隊形は種々に變化させてもよい。

(四) 前後列とも整列線の前方に一横線を引き、繩を受取り出發する所とする方がよい。

(交換教材)

(一) 片足競走

一、準備 小輪拾個

二、方法 全兒童を一組拾人位づゝに分け横隊に並べる。

用意の號令で片膝を曲げ片手を以て其足首を握る。始の號令で前方決勝點まで競走する。

三、注意



- (一) 二人繩跳、8字競争等種々の隊形にて行はしむるもよい。
- (二) 土俵場にて片足押出しをなさせるも一法である。
- (三) 片足を體前に曲げ、小輪を足首に掛けてそれを持たしむるもよい。

(二) 砲彈

一、準備 フットボール一個

二、方法 全兒童を赤白の二組に分ち、運動帽を被つて、一定の区域内(縦十五間横十間位)に兩組共各自任意の場所に居らせ、中立者はフットボールを持つて場の中央に位置する。

始めの號令と共に教師は持て居る毬を高投する。其毬を赤白何れでも拾つて直ちに敵に投擲する。而して其の投げたる毬は再び何れの組でも拾つて亦之を敵に向つて投擲する。若し毬を當てられた時は直に所定の場所に行つて整列する。斯くの如くして教師は時機を見て休戦せしめ人數を檢して残つてゐる人數の多い方を勝とする。

三、注意

- (一) 赤白何れか全部盡る迄行ふも可。
- (二) 毬が體をかすつたばかりの時は無効とする。徳義を重んじ争のない様にする。
- (三) 毬が區域外に出た時は近いものが之を拾つてくること。此場合には區域外と雖も敵に投擲することが出来る。
- (四) 毬は拾つた場所で投擲すること。若し毬を拾つて走つた時は敵に其毬を渡すこと。
- (五) 敵の投た毬は地に落ちぬ前に受取ること。出来ぬ。但し一旦地に落ちたものは拾つてもよい。
- (六) 毬は味方のものに投擲するのは差支ないが決して手渡してはならぬ。
- (七) 場所は人數によつて適宜増減するがよい。テニスのコートを利用するのが便利である。

(三) 蛙跳

一、準備 なし。



二、方法 全生を兩手間隔の四列横隊に並べ、各列六歩位の距離を取る。用意の號令で第一及び第三列は片足を前出し、上體を前屈し、前脚の膝を半屈し、兩手で之を支へ馬となる。始の號令で第二列及第四列は馬の背に兩手を着け、兩足で踏切り、跳越して六歩前進直立すると同時に、馬となりしものは直立の姿勢となる。次に用意始めの號令で反對の動作をする。斯の如く數回交互に行ふ。

三、注意

- (一) 此運動は最初踏切り、跳越後の躍進、及び馬の作り方等を細かく教へて、規律的に充分練習させるがよい。
- (二) 競争的に行はしむるには出發點より決勝點迄の間に馬の位置となるとき數個所に横線を引て交互に數回前進、跳越して決勝點に着するようによればよい。
- (三) 馬は兩足を揃へて横向きにするもよし。

二 遊戯教授上の注意

- 一、協同して事に當り、禮を以て衆に和するの美風を養成すること。徳性を害する粗暴野卑罵詈の行爲があつてはならぬ。
- 二、規律を守る習慣を養ふこと。懶惰不規律の行爲があつてはならぬ。熱狂して不規律無秩序に陥つてはならぬ。
- 三、正義を尊び勇氣を重んずる精神を養ふこと。不正の勝利を得ようとし、又は到底勝つべからざるを見て、其技を中止するが如きことがあつてはならぬ。
- 四、獨立自由の氣象を養ふこと。故に或る程度迄は兒童の自由に任かすがよい。徒らに干渉して兒童本性の活動を抑壓してはならぬ。
- 五、教師は成るべく戲伴に加はり師弟の情を濃にすること。その傍兒童の個性觀察を忘れてはならぬ。



六、競技に於て最も尙ぶべきは自己の全力を盡すにあることを服膺させること。  
 七、決勝後教師は兒童の技術方法、態度其他に就て公平なる批評を加ふるがよい。  
 八、遊戲に用ふる器具器械は清潔にし、且つ丁寧に取扱はしむる様に留意するがよい。

九、毎時間其の目的を定め、其目的に向つて教授せねばならぬ。目的の數多ある場合には此の時間には其の中の何を主眼として取扱ふべきかに注意せねばならぬ。

一〇、準備を敏速にすること。

準備に多くの時間を要し、遊戲の時間を減ずるのは誠に遺憾である。

二、過度に疲勞せしめぬ様に注意すること。

兒童の望みに任せて度を過ぎが如きことは慎むべきことである。

三、教師は遊戲に熟達し、活潑なる態度を以て巧に模範を示し、兒童をして自から興味を起し、進んで模倣せしむる様にせねばならぬ。

### 第五章 遊戲の道具（兒童數五〇）

- 一、帽子 赤二五 白二五
- 一、長サ八尺竹 二本
- 一、棒 赤二五 白二五
- 一、小毬 赤二五 白二五
- 一、籠（經一尺五寸） 二
- 一、旗 五
- 一、小輪 五〇
- 一、大六輪
- 一、大球 二
- 一、フットボール 二
- 一、土俵 二
- 一、跳繩 二十尺 七尺 八尺



大正六年七月三十日印刷  
大正六年八月七日發行

定價金貳拾錢

不許  
複製

著者 小學教育研究會

代表者 主幹 山松鶴吉

發行所 東京市京橋區南傳馬町一丁目一番地

戶田節次郎

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷者 佐久間衡治

發賣所

東京市京橋區南傳馬町一丁目  
電話京橋二七四九番  
振替口座(東京)二三三五七番

目黒分店



FEIC-17



終

